

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

年報（第 9 号）

平成 21 年 4 月～平成 23 年 3 月

はじめに

2011年3月11日、日本にたいへんなことが起きてしまいました。東日本大震災、マグニチュード9.0の地震に引き続いて押し寄せた波高10m以上、最大遡上高38.9mの大津波によって東北地方の太平洋沿岸を中心とした広域で、人々の生活、家々や学校や職場などのすべてが押し流され、さらに併発してしまった福島第一原子力発電所事故が放射性物質を排出し続けています。被災された皆様、関係者の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

ここに家族看護学教室年報の第9号が出来上がりました。健康科学・看護学専攻内外の諸先輩方のご指導のもと、平成21(2009)年度、平成22(2010)年度を無事終えることができましたことを、ご報告しお礼申し上げます。ありがとうございました。

2009年度は新型インフルエンザ(A/H1N1)のパンデミックが発生し、医療保健関係者のみならず、保育所、学校、事業所などの gate person をはじめとする多くの人々が、感染者、感染ハイリスク者への対応および、感染拡大防止のための対策に迫られました。日本の対策は効あって、死亡率を世界で最小に喰いとめることができ、また2010年度に世界でもこのパンデミックが再発生しなかったことは、不幸中の幸いと言わざるを得ないでしょう。また国立感染症研究所による学校や保育所の感染症サーベイランスシステムも、これを契機に普及拡大しつつある点も、good point の一つに数えられるでしょう。

感染症問題にせよ災害問題にせよ、保健・看護の重要性はますます誰もが認めるところとなりました。その中で2010年4月より私たちの学科は、「健康科学・看護学科」から「健康総合科学科」に学科名称を変更いたしました。諸条件を勘案して学科会議で決定し、学内の諸手続きを経て文部科学省で認められるに至りました。2010年9月には、健康科学・看護学専攻および国際保健学専攻のすべての教室主任が外部評価を受け、医学部全体での将来計画が進みつつあります。よき伝統を残しつつも時代の要請に応える、よい形の学科・専攻になっていくものと信じています。

この2年間に当教室に所属して学位を授与された者は、学士4名(大川真穂君、国分麻紀君、坂本 裕君、松原由季君)、修士5名(大塚寛子君、東樹京子君、野中らいら君、三井千佳君、渡邊栄美君)、博士1名(池田真理君)です。おめでとうございます。またこの年度末をもって2名の先生が栄転されました。学部および大学院教育に励んでくれ、私のご意見番を務めてくれた山崎あけみ先生と、乳児虐待予防の研究を牽引してくれ、ムードメーカーでもあった杉下佳文先生です。ますますの活躍を祈念します。

今後ともどうぞ当教室へのご理解と、ご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

平成23年3月

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野
准教授 上 別 府 圭 子

目 次

はじめに

1. 研究活動

1-1. 学術研究業績	4
-------------	---

1-2. 研究費	26
----------	----

1-3. 学内外の公的活動	29
---------------	----

2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）	30
-------------------------	----

3. 教室カンファレンス	31
--------------	----

4. 家族看護学教室研究会

4-1. 家族看護学研究会	48
---------------	----

4-2. 家族ケア症例研究会	49
----------------	----

5. 量的研究勉強会（院生自主勉強会）	51
---------------------	----

6. 教育活動（担当講義・実習）	53
------------------	----

7. 教室の沿革	57
----------	----

資料（卒業論文・修士論文・博士論文）	58
--------------------	----

家族看護学教室 教室員（平成 21 年度～平成 22 年度）

1. 研究活動

1-1. 学術研究業績

論文（原著論文・総説）

Kamibeppu K, Furuta M, Yamashita H, Sugishita K, Suzumiya H, Yoshida K. Training health professionals to detect and support mothers at risk of postpartum depression or infant abuse in the community: A cross-sectional and a before and after study. *BioScience Trends*. 2009; 3(1): 17-24.

Yonemoto T, Kamibeppu K, Ishii T, Iwata S, Hagiwara Y, Tatezaki S. Psychosocial outcomes in long-term survivors of high-grade Osteosarcoma: A Japanese single-center experience. *Anticancer Research*. 2009; 29(10): 4287-4290.

Kamibeppu K, Sato I, Honda M, Ozono S, Sakamoto N, Iwai T, Okamura J, Asami K, Maeda N, Inada H, Kakee N, Horibe K, Ishida Y. Mental health among young adult survivors of childhood cancer and their siblings including posttraumatic growth. *Journal of Cancer Survivorship: Research and Practice*. 2010; 4: 303-312.

Ishida Y, Honda M, Ozono S, Okamura J, Asami K, Maeda N, Sakamoto N, Inada H, Iwai T, Kamibeppu K, Kakee N, Horibe K. Late effects and quality of life of childhood cancer survivors: Part 1 Impact of the stem cell transplantation. *International Journal of Hematology*. 2010; 91: 865-876.

Ishida Y, Sakamoto N, Kamibeppu K, Kakee N, Iwai T, Ozono S, Maeda N, Okamura J, Asami K, Inada H, Honda M, Horibe K. Late effects and quality of life of childhood cancer survivors: Part 2 Impact of radiotherapy. *International Journal of Hematology*. 2010; 92: 95-104.

Ishida Y, Ozono S, Honda M, Maeda N, Okamura J, Asami K, Iwai T, Kamibeppu K, Inada H, Sakamoto N, Kakee N, Horibe K. Medical visits of childhood cancer survivors in Japan: A cross-sectional survey. *Pediatrics International*. 2010. [in press].

Yamazaki A. Living with their stillborn babies as family members: Japanese women who experienced intrauterine fetal death after 28 weeks gestation. *Health Care for Women International*. 2010;31: 921-937.

Kobayashi K, Kamibeppu K. Measuring quality of life in Japanese children: development of the Japanese version of PedsQL™. *Pediatrics International*. 2010; 52(1): 80-88.

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Mukasa A, Ida K, Sawamura Y, Sugiyama K, Saito N, Kumabe T, Terasaki M, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Development of the Japanese version of the Pediatric Quality of Life Inventory™ Brain Tumor Module. *Health and Quality of Life Outcomes*. 2010; 8: 38. [Open access].

Chen J, Murayama S, Kamibeppu K. Factors related to well-being among the elderly in urban China focusing on multiple roles. *BioScience Trends*. 2010; 4(2): 61-71.

Ikeda T, Nakata A, Takahashi M, Hojou M, Haratani T, Nishikido N, Kamibeppu K. Correlates of depressive symptoms among workers in small and medium-scale manufacturing enterprises in Japan. *Journal of Occupational Health*. 2009; 51: 26-37.

Wakimizu R, Kamagata S, Kuwabara T, Kamibeppu K. A randomized controlled trial of an at-home preparation program for Japanese preschool children: effects on children's and caregivers' anxiety associated with surgery. *Journal of Evaluation in Clinical Practice*. 2009; 15(2): 393-401.

Kondo-Endo K, Ohashi Y, Nakagawa H, Katsunuma T, Ohya Y, Kamibeppu K, Masuko I. Development and validation of a questionnaire measuring quality of life in primary caregivers of children with atopic dermatitis (QPCAD). *British Journal of Dermatology*. 2009; 161(3): 617-25.

Ueno R, Kamibeppu K. Relationship between positive self-recognition of maternal role and psychosocial factors in Japanese mothers with severe mental illness. *Community Mental Health Journal*. 2010. [Epub ahead of print].

Matsumoto K, Nagamura F, Ogami Y, Yamashita N, Kamibeppu K. Difficulties of nursing staff involved in Phase 1 oncology trials in Japan. *Cancer Nursing: International Journal for Cancer Care*. 2011; Jan 15. [Epub ahead of print].

上別府圭子, 杉下佳文, 栗原佳代子, 村山志保, 山崎あけみ. 周産期のメンタルヘルスと虐待予防のための育児支援システム構築に関する研究(1): 地域母子保健からの検討. *子どもの虐待とネグレクト*. 2010; 12(1): 61-68.

石田也寸志, 本田美里, 上別府圭子, 大園秀一, 岩井艶子, 掛江直子, 坂本なほ子, 岡村純, 浅見恵子, 稲田浩子, 前田尚子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症および Quality of Life (QOL)の実態に関する横断的歴調査研究 第1報: 調査方法と対象. 日本小児科学学会雑誌. 2010; 114(4): 665-675.

石田也寸志, 大園秀一, 本田美里, 浅見恵子, 前田尚子, 岡村純, 稲田浩子, 上別府圭子, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症および Quality of Life (QOL)の実態に関する横断的歴調査研究 第2報: 身体的特徴と晩期合併症のリスク因子. 日本小児科学学会雑誌. 2010; 114(4): 676-686.

山崎あけみ. ペリネイタルロスを体験したカップルについての質的研究ー生活を共にできなかった子どものいる家族の発達過程ー. 看護研究. 2010;44(2):198-211.

杉下佳文, 栗原佳代子, 古田正代, 池田真理, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期メンタルヘルスと子ども虐待対応に関する全国医療機関の取り組み. 日本周産期・新生児医学会雑誌. 2011; 47(1): 86-91.

西垣佳織, 黒木春郎, 江川文誠, 藤岡寛, 上別府圭子. 在宅重症心身障害児を対象としたレスパイトケアの利用/提供に関連する要因. 外来小児科. 2010; 13(2): 98-108.

佐藤伊織, 上別府圭子. 小児がんを持つ子どものきょうだいに対する「情報提供」と「情報共有」ーきょうだいへの説明に注目した文献レビューー. 小児がん. 2009; 46 (1) : 31-38.

藤岡寛, 上別府圭子. 小児慢性疾患患者における服薬の意思形成プロセスに関する質的研究. 小児保健研究. 2009; 68(6): 654-661.

村上慶子, 西垣佳織, 上別府圭子. 東京都 23 区内の保育所における保健活動と看護職の役割に関する実態調査. 小児保健研究. 2009; 68(3): 387-394.

相場繁, 上別府圭子. 1 私立高校の生徒における抑うつの実態と、それに関連する要因ー両親からのソーシャルサポートに注目してー. 児童青年精神医学とその近接領域. 2010; 51(1): 21-30.

上野里絵, 上別府圭子. 精神疾患を有し子育てをしている女性の特徴およびサポートの実態: 主治医による配偶者への病気説明の有無を含めた検討. こころの健康. 2010; 25(2): 35-43.

津村明美, 山崎あけみ, 上別府圭子. 終末期の過ごし方の意思決定における悪性グリオーマ患者・家族への看護方略. 日本看護科学会誌. 2010; 30(4): 27-35.

栗原佳代子, 杉下佳文, 池田真理, 山崎あけみ, 古田正代, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスと虐待予防のための育児支援システム構築に関する研究(2): 医療機関からの検討. 子どもの虐待とネグレクト. 2010; 12(1): 69-77.

松本和史, 長村文孝, 藤原紀子, 尾上裕子, 上別府圭子, 山下直秀. 看護系大学院におけるトランスレーショナルリサーチ看護学の教育プログラムの構築. 看護教育. 2010; 51(8): 696-700.

論文（依頼原稿など）

上別府圭子. 【家族と描画 ひとまとまりの家族をとらえる工夫】質的研究で家族をとらえる 羅生門的手法の吟味. 臨床描画研究. 2009; 24: 56-69.

上別府圭子, 杉下佳文. 【妊産婦へのメンタルケア】産後うつ病: 退院前にできる支援と地域との連携. 妊産婦と赤ちゃんケア. 2009; 1(2): 17-22.

上別府圭子, 東樹京子. 子どもと家族の緩和ケア. 臨床精神医学. 2010; 39(7): 921-926.

上別府圭子, 三井千佳. 子どもの緩和医療. 精神科. 2010; 16(2): 101-106.

山崎あけみ, 中村奈央, 西村英代. 周産期の子どもの死と家族へのケアー褥婦にできる家族中心のアプローチのポイントー. 臨床看護. 2009; 35(10): 1463-1469.

山崎あけみ. 家族の子育て機能はいかに発生し育まれるのか. 保健の科学. 2011; 53(1): 22-26.

杉下佳文, 山本弘江, 上別府圭子. 【周産期からの子どもの虐待予防】子どもの虐待予防に助産師はどうかかわるか. 助産雑誌. 2009; 63(2): 129-132.

杉下佳文, 栗原佳代子, 塩ノ谷真弓, 高宮智典, 花山美奈子, 山下洋, 上別府圭子. 医療機関に求められる保健・福祉との連携ー1次予防を含めてー. 子どもの虐待とネグレクト. 2011; 13(1). [in press]

池田真理, 杉下佳文, 山本弘江, 栗原佳代子, 古田正代, 大塚寛子, 山崎あけみ, 上別府圭子. 周産期メンタルヘルスと育児支援の勉強会－病院スタッフと研究班とのコラボレーション. 家族看護. 2009; 7(2): 98-106.

佐藤伊織, 上別府圭子. 小児脳腫瘍患者の QOL. 日本臨牀. 2010; 68(増刊号 10): 657-661.

大塚(小野)寛子, 桑名佳代子. 女性の健康を支援する女性外来における看護職の役割 リプロダクティブヘルス/ライツの視点から. 宮城大学看護学部紀要. 2010; 13(1): 1-14.

安藤朗子, 平岡雪雄, 川井尚, 武島春乃, 庄司順一, 中村敬, 恒次欽也, 酒井幸子, 山川恵美子, 小玉夕香, 堤美智子, 宮澤理恵, 永井桃子, 鈴木真弓, 加来嘉誉子, 渡邊寛, 大藪泰, 馬岡清人, 島智久, 伊藤嘉余子, 山岡テイ, 古河浩子, 栗原佳代子. 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅲ－母親版との比較検討－. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 2010; 46: 231-246.

安藤朗子, 平岡雪雄, 川井尚, 栗原佳代子, 佐藤紀子, 石井のぞみ, 山口規容子. 極低出生体重児の発達研究(6)－9 歳(小学校 3 年) 時の知的発達状況と家庭及び学校生活との関連について－. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 2010; 46: 257-264.

学会二次抄録など

上別府圭子, 東樹京子, 佐藤伊織, 三井千佳, 武田鉄郎, 堀部敬三. 小児がん患者・家族へのスムーズな復学に向けた支援 医療機関といわゆる院内学級による取り組み. 小児がん. 2009;46(プログラム・総会号) :349.

米本司, 上別府圭子, 石井猛, 岩田慎太郎, 萩原洋子, 舘崎慎一郎. 骨肉腫の長期生存者の心理社会的な転帰. 小児がん. 2009;46(プログラム・総会号) :259.

大園秀一, 石田也寸志, 稲田浩子, 本田美里, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 前田美穂, 上別府圭子, 前田尚子, 堀部敬三. 小児がん経験者の身体的晩期合併症に関する多施設共同横断的調査の解析. 小児がん. 2009;46(プログラム・総会号) :259.

高橋都, 上別府圭子. お母さんの病気, 本当は何なの? 子どもへの病気説明に関する面接調査から. 第 17 回日本乳癌学会総会プログラム抄録集. 2009: 280.

米本司, 上別府圭子, 石井猛, 岩田慎太郎, 萩原洋子, 舘崎慎一郎. 骨肉腫瘍の長期生存者の心理社会的な転帰. 日本整形外科学会雑誌 2009; 83(6): S867.

米本司, 石井猛, 岩田慎太郎, 萩原洋子, 舘崎慎一郎, 上別府圭子. 骨肉腫瘍の長期生存者の心理社会的な転帰. 千葉医学雑誌. 2010; 86(4): 157.

石田也寸志, 本田美里, 大園秀一, 岡村純, 浅見恵子, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 上別府圭子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症と QOL の横断的調査研究 造血幹細胞移植の影響. 日本小児科学会雑誌. 2009; 113(2): 305.

大園秀一, 石田也寸志, 本田美里, 岡村純, 浅見恵子, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 上別府圭子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症と QOL の横断的調査研究 体的晩期合併症の解析. 日本小児科学会雑誌. 2009; 113(2): 347.

岩井艶子, 石田也寸志, 本田美里, 岡村純, 大園秀一, 浅見恵子, 坂本なほ子, 掛江直子, 上別府圭子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症と QOL の横断的調査研究 結婚、妊娠等に関する検討. 日本小児科学会雑誌. 2009; 113(2): 377.

杉下佳文, 栗原佳代子, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスと子供虐待予防に関する育児支援システムの実態調査. 日本周産期メンタルヘルス研究会会報. 2010; 4: 12-13.

山本弘江, 栗原佳代子, 杉下佳文, 池田真理, 古田正代, 山崎あけみ, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスに着目した助産師の継続看護について. 母性衛生. 2009; 50(3): 131.

池田真理, 杉下佳文, 古田正代, 栗原佳代子, 大塚寛子, 山本弘江, 山崎あけみ, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスケアの実態調査 妊娠中からの産後うつに関する情報支援, スクリーニングに着目して. 母性衛生. 2009; 50(3): 113.

西垣佳織, 黒木春郎, 江川文誠, 上別府圭子. 自宅で生活する重症心身障害児主介護者のレスパイトケア(RC)利用に関連する要因. 外来小児科. 2009; 12(4): 610-611.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 武笠晃丈, 井田孔明, 澤村豊, 杉山一彦, 齊藤延人, 隈部俊宏, 寺崎端彦, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. Pediatric quality of life inventory 脳腫瘍モジュール(PedsQL- B)日本語版の項目分析. 小児がん. 2009; 46(プログラム・総会号): 498.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 武笠晃丈, 井田孔明, 澤村豊, 杉山一彦, 斉藤延人, 隈部俊宏, 寺崎瑞彦, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. 脳腫瘍を持つ子どもとその保護者が関心を持つ心理社会的予後の要素. 第26回日本小児がん学会学術集会プログラム. 2010: 471.

東樹 京子, 山本光映, 佐藤伊織, 三井千佳, 野中らいら, 村山志保, 吉川久美子, 上別府圭子. 小児がん患児の復学支援 - 感染症に対する看護師からの情報提供 -. 小児がん. 2010; 47(プログラム・総会号): 263.

国分麻紀, 山本弘江, 上別府圭子. 妊娠期における夫婦の性生活に対する意識と親意識の関連. 母性衛生. 2010; 51(3): 119.

副島堯史, 東樹京子, 佐藤伊織, 武田鉄郎, 上別府圭子. 小児がんおよび小児がん経験者に対する児童生徒の認識と態度. 小児がん. 2009; 46(プログラム・総会号): 290.

三條真紀子, 塩崎麻里, 吉田沙蘭, 森田達也, 宮下光令, 上別府圭子, 垣藤暁, 志真泰夫, 平井啓. ホスピス・緩和ケア病棟への入院検討時の家族のつらさと望ましい支援に関する質的研究 遺族への面接調査の結果から. 日本緩和医療学会学術大会プログラム. 2010: 215.

三條真紀子, 宮下光令, 森田達也, 佐藤一樹, 上別府圭子, 垣藤暁, 志真泰夫. 終末期のがん患者を介護した遺族の介護経験の評価および健康関連 QOL 7994 名の全国調査 J-HOPE Study. 日本緩和医療学会学術大会プログラム. 2010: 164.

三條真紀子, 宮下光令, 森田達也, 栗原幸江, 上別府圭子, 平井啓. 「終末期がん患者の家族が大事にしたいと思うこと」の概念化 一般集団・遺族 1975 名を対象とした全国調査の結果から. 日本緩和医療学会学術大会プログラム. 2010: 156.

著書・編著・教科書など

原田隆之, 大島巖, 津富宏, 上別府圭子 (監訳). ランダム化比較試験(RCT)の設計 ヒューマンサービス, 社会科学領域における活用のために. 東京: D.J.トーガーソン, C.J.トーガーソン 著/日本評論社; 2010.

上別府圭子, 上野里絵. 第3章 心理教育 (3) 家族への心理教育. 治療者のための女性のうつ病ガイドブック. 上島国利 監修, 平島奈津子 編著/金剛出版; 2010: 217-226.

上別府圭子，伊藤圭子，沖野慎治，瀬戸光，中村晃士，小野和哉．Ⅱ.家族機能・思春期関連検査．精神科診療データブック．東京：松下正明 総編集，浅井昌弘・中根允文 編集，笠井清登，加藤元一郎，中根秀行 編集協力／中山書店；2010：217-243.

上別府圭子．【症候性てんかん】【焦点運動発作】In: 精神保健看護辞典．東京：精神保健看護辞典編集委員会編／オーム社；2010：167, 168-169.

山崎あけみ．命と家族の誕生を育む営み 現代のエスプリ：特集「看護という営み：最良のナースが育つことの大切さ」．2010；510：60-68.

栗原佳代子．【象徴化】【情緒不安定性人格障害】【衝動】【衝動行為】【情動失禁】【衝動性】In: 精神保健看護辞典．東京：精神保健看護辞典編集委員会編／オーム社；2010：168, 169, 170.

上野里絵．【小規模作業所】【小規模授産施設】【小規模通所授産施設】【少子高齢化】【症状精神病】【状態像】In: 精神保健看護辞典．東京：精神保健看護辞典編集委員会編／オーム社；2010：168, 167.

上野里絵，上別府圭子．慢性期家族看護の事例展開⑧ 家族のインターフェイス膜の調整不全—精神障がい者と共に生きる家族のケース—．In: 新しい家族看護学—理論・実践・研究—．東京：メヂカルフレンド社；2010：346-354.

池田真理．【情緒】【情緒体験】【情緒発達】【情緒的関与】【情緒的反応】【情緒的理由づけ】In: 精神保健看護辞典．東京：精神保健看護辞典編集委員会編／オーム社；2010：167-168,168.

佐藤伊織，上別府圭子，患者・家族アセスメント．In：丸光恵，石田也寸志，監修．ココからはじめる小児がん看護 疾患の理解から臨床での活用まで．東京：へるす出版；2009：263-269.

藤岡寛，上別府圭子．死にゆく子どもの心理と社会関係〔1〕死の概念．In: 日本医療保育学会認定 医療保育専門士研修用テキスト．東京：日本医療保育学会；2009：217-218, 422-424.

藤岡寛，上別府圭子．死にゆく子どもの心理と社会関係〔2〕死の気づきと受容．In: 日本医療保育学会認定 医療保育専門士研修用テキスト．東京：日本医療保育学会；2009：218-220, 422-424.

研究班会議・報告書など

上別府圭子，武田鉄郎，平賀健太郎，泉真由子，副島堯史，東樹京子，田中賀陽子，堀部敬三. 小児がん患者のスムーズな復学のための本人・家族への支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）平成 20 年度 分担研究報告書. In: 真部淳，細谷亮太，小澤美和，的場元弘，押川真喜子，鈴木伸一，小田滋，上別府圭子，堀部敬三. 働き盛りや子育て世代のがん患者やがん経験者、小児がんの患者を持つ家族の支援の在り方についての研究，厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）平成 20 年度総括研究報告書. 2009 年 3 月. 28-36.

上別府圭子，山崎あけみ，杉下佳文，山本弘江，山下洋，栗原佳代子，古田正代，池田真理，大塚寛子. 周産期のメンタルヘルスと育児支援のシステム構築に関する研究. 財団法人こども未来財団 平成 20 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書. 2009 年 3 月.

上別府圭子. 日本の Childhood Cancer Survivors におけるメンタルヘルス. 平成 21 年度 厚生労働省がん助成金「小児がん経験者の QOL と予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究」第 2 回研究班会議，2009 年 11 月 22 日，東京都中央区.

上別府圭子. 小児がん経験者の晩期合併症および QOL の実態に関する横断的調査研究（その 4 心理社会的健康について）. 平成 21 年度 厚生労働省がん助成金第 3 回石田班分担班会議，2010 年 2 月 6 日，東京都中央区.

上別府圭子，山本弘江，西垣佳織，國重俊亮. 保育所の環境整備に関する研究－保育所看護師等に焦点を当てた調査－. 東京：社会福祉法人日本保育協会. 2010 年 3 月.

上別府圭子，村山志保，佐藤伊織，東樹京子，野中らいら，三井千佳，副島堯史. 小児がん患者のスムーズな復学のための本人・家族への支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）分担研究報告書. 2010 年 3 月.

上別府圭子，武田鉄郎，平賀健太郎，泉真由子，吉川久美子，村山志保，佐藤伊織，東樹京子，野中らいら，三井千佳，副島堯史，田中賀陽子，山本光映. 小児がん患者のスムーズな復学のための本人・家族への支援に関する研究，厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）分担研究報告書 In: 真部淳，細谷亮太，小澤美和，的場元弘，押川真喜子，鈴木伸一，小田滋，上別府圭子，堀部敬三，高橋都. 働き盛りや子育て世代のがん患者やがん経験者、小児がんの患者を持つ家族の支援の在り方についての研究，厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）平成 20 年度総括研究報告書. 2010 年 3 月. 53-79.

上別府圭子. 小児がん経験者の晩期合併症および QOL の実態に関する横断的調査研究 (Web 調査による一般集団との比較について). 平成 21 年度 厚生労働省がん助成金「小児がん経験者の QOL と予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究」第 1 回石田班分担班会議, 2010 年 6 月 20 日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子. 小児がん経験者の晩期合併症および QOL の実態に関する横断的調査研究 (心理社会的側面について). 平成 21 年度 厚生労働省がん助成金第 2 回石田班分担班会議, 2010 年 9 月 19 日, 東京都中央区.

上別府圭子, 山崎あけみ, 杉下佳文, 山本弘江.

医療者向け「周産期のメンタルヘルスと育児支援」の啓発教育活動. (財)メンタルヘルス岡本記念財団 2009 年度 研究助成報告集(第 21 号); 2010: 81-84.

学会・研究発表

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Mukasa A, Ida K, Sawamura Y, Sugiyama K, Saito N, Kumabe T, Terasaki M, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Development of the Japanese version of Pediatric Quality of Life InventoryTM Brain Tumor Module. The 3rd Quadrennial Meeting of the World Federation of Neuro-Oncology & the 6th Meeting of the Asian Society for Neuro-Oncology, 2009 May 11-14, Yokohama, Japan.

Ueno R, Kamibeppu K. Relationship between positive recognition of a mother's role and maternal psychosocial factors in Japanese mothers with mental illness. 2009 World Congress of the World Federation for Mental Health, 2009 Sep 2-6, Athens, Greece.

Sato I, Kamibeppu K, Honda M, Ozono S, Iwai T, Sakamoto N, Kakee N, Okamura J, Asami K, Maeda N, Inada H, Horibe K, Ishida Y. Posttraumatic growth among survivors of childhood cancer. 41st Annual Conference of the International Society of Paediatric Oncology, 2009 Oct 5-9, Sao Paulo, Brazil.

Ishida Y, Kamibeppu K, Honda M, Ozono S, Iwai T, Sakamoto N, Kakee N, Okamura J, Asami K, Maeda N, Inada H, Horibe K. Late effects and health-related quality of life of childhood cancer survivors after stem cell transplantation. The 41st Annual Meeting of the International Society of Pediatric Oncology (SIOP 2009), 2009 Oct 5-9, Sao Paulo, Brazil.

Manabe A, Ozawa M, Higuchi A, Kondo H, Matoba M, Oshikawa M, Suzuki S, Oda M, Kamibeppu K, Horibe K, Hosoya R. (Poster session) A comprehensive support for families having children with cancer. The 41st Annual Meeting of the International Society of Pediatric Oncology (SIOP 2009), 2009 Oct 5-9, Sao Paulo, Brazil.

Matsumoto K, Nagamura F, Fujiwara N, Ogami Y, Sugishita K, Yamazaki A, Kamibeppu K, Yamashita N. The Development of the Scholastic Program for the Graduate Students of Nurses in the Area of Translational Research. The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, 2009 Sept 19-20, Kobe, Japan.

Ishida Y, Honda M, Sakamoto N, Ozono S, Iwai T, Kamibeppu K, Kakee N, Horibe K.
Social outcomes and medical visits of childhood cancer survivors in Japan: Marriage, education, employment and medical visits. European Symposium on Late Complications after Childhood Cancer 2009, 2009 Oct 29-30, Edinburgh, UK.

Honda M, Ishida Y, Sakamoto N, Ozono S, Iwai T, Kamibeppu K, Kakee N, Horibe K.
Quality of life among long-term adolescent and adult survivors of childhood cancer in Japan
European Symposium on Late Complications after Childhood Cancer 2009, 2009 Oct 29-30, Edinburgh, UK.

Ishida Y, Kamibeppu K, Honda M, Ozono S, Iwai T, Sakamoto N, Kakee N, Okamura J, Asami K, Maeda N, Inada H, Horibe K. Social outcomes and QOL of childhood cancer survivors in Japan: Marriage, education, employment and health related QOL (SF-36), the 24th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP). 2010 Oct 21-24, Boston, USA.

大園秀一, 石田也寸志, 本田美里, 岡村純, 浅見恵子, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 上別府圭子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症と QOL の横断的調査研究 晩期合併症の解析. 第 112 回日本小児科学会学術集会, 2009 年 4 月 17 日-19 日, 奈良県奈良市.

石田也寸志, 本田美里, 大園秀一, 岡村純, 浅見恵子, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 上別府圭子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症と QOL の横断的調査研究 造血幹細胞移植の影響. 第 112 回日本小児科学会学術集会, 2009 年 4 月 17 日-19 日, 奈良県奈良市.

岩井艶子, 石田也寸志, 本田美里, 岡村純, 大園秀一, 浅見恵子, 坂本なほ子, 掛江直子, 上別府圭子, 堀部敬三. 小児がん経験者の晩期合併症と QOL の横断的調査研究 結婚、妊娠等に関する検討. 第 112 回日本小児科学会学術集会, 2009 年 4 月 17 日-19 日, 奈良県奈良市.

高橋都, 上別府圭子. 「お母さんの病気, 本当は何なの?」—子どもへの病気説明に関する面接調査から. 第 17 回日本乳癌学会学術総会, 2009 年 7 月 3 日-4 日, 東京都港区.

西垣佳織, 黒木春郎, 江川文誠, 上別府圭子. 自宅で生活する重症心身障害児主介護者のレスパイトケア(RC)利用に関連する要因. 第 19 回日本外来小児科学会学術集会, 2009 年 8 月 28 日-30 日, 群馬県大宮市.

津村明美, 山崎あけみ, 上別府圭子. 終末期の過ごし方の意思決定における悪性グリオーマ患者・家族への看護の構造. 第 16 回日本家族看護学会学術集会, 2009 年 9 月 5 日-6 日, 岐阜県高山市.

山本弘江, 栗原佳代子, 杉下佳文, 池田真理, 古田正代, 山崎あけみ, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスに着目した助産師の継続看護について. 第 50 回日本母性衛生学会, 2009 年 9 月 27 日-28 日, 神奈川県横浜市.

池田真理, 杉下佳文, 古田正代, 栗原佳代子, 大塚寛子, 山本弘江, 山崎あけみ, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスケアの実態調査—妊娠中の産後うつに関する情報支援、および妊娠前から産後までのメンタルヘルス・スクリーニングの実施に着目して—. 第 50 回日本母性衛生学会, 2009 年 9 月 27 日-28 日, 神奈川県横浜市.

山本弘江, 村井文江. 母親の育児に対する自信の変化と影響する因子について. 第 50 回日本母性衛生学会, 2009 年 9 月 27 日-28 日, 神奈川県横浜市.

大塚寛子, 上別府圭子. (話題提供) 高校生の性周期に伴う愁訴と月経前、および月経中の心身のイメージに関連する要因—月経セルフケア・PMS (月経前症候群) に関する教育プログラム実施に向けての基礎調査—. 平成 21 年年度第 4 回健やか親子幹事会, 2009 年 11 月 4 日, 東京都港区.

田口良子, 坂本なほ子, 上別府圭子, 佐藤伊織. 青年期・成人期男女における精神健康および QOL の決定要因の検討. 第 74 回日本民族衛生学会総会, 2009 年 11 月 12 日-13 日, 京都府.

副島堯史, 東樹京子, 佐藤伊織, 武田鉄郎, 上別府圭子. 小児がんおよび小児がん経験者に対する児童生徒の認識と態度. 第7回日本小児がん看護学会, 2009年11月27日-29日, 千葉県.

上別府圭子, 東樹京子, 佐藤伊織, 三井千佳, 武田鉄郎, 堀部敬三. 小児がん患者・家族へのスムーズな復学に向けた支援 ―医療機関といわゆる院内学級による取り組み―. 第25回日本小児がん学会, 2009年11月27日-29日, 千葉県.

大園秀一, 石田也寸志, 稲田浩子, 本田美里, 岩井艶子, 坂本なほ子, 掛江直子, 前田美穂, 上別府圭子, 前田尚子, 堀部敬三. 小児がん経験者の身体的晩期合併症に関する多施設共同横断的調査の解析. 第25回日本小児がん学会, 2009年11月27日-29日, 千葉県浦安市.

米本司, 上別府圭子, 石井猛, 岩田慎太郎, 萩原洋子, 舘崎慎一郎. 骨肉腫の長期生存者の心理社会的な転帰. 第25回日本小児がん学会, 2009年11月27日-29日, 千葉県浦安市.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 武笠晃丈, 井田孔明, 澤村豊, 杉山一彦, 斉藤延人, 隈部俊宏, 寺崎瑞彦, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. Pediatric Quality of Life InventoryTM 脳腫瘍モジュール(PedsQL-B)日本語版の項目分析. 第25回日本小児がん学会, 2009年11月27日-29日, 千葉県浦安市.

栗原佳代子, 杉下佳文, 池田真理, 山崎あけみ, 古田正代, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスと育児支援システム構築に関する医療機関の取り組み. 日本子ども虐待防止学会第15回学術集会, 2009年11月27日-29日, 埼玉県さいたま市.

杉下佳文, 古田正代, 栗原佳代子, 池田真理, 山崎あけみ, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスと子ども虐待予防に関する全国医療機関の取り組み. 日本子ども虐待防止学会第15回学術集会, 2009年11月27日-29日, 埼玉県さいたま市.

松本和史, 長村文孝, 藤原紀子, 尾上裕子, 上別府圭子, 山下直秀. 看護大学院での体験型授業を活用したトランスレーショナルリサーチにおけるコーディネータ教育. 日本臨床試験研究会第1回学術集会総会, 2010年1月22日, 東京都.

三條真紀子, 宮下光令, 森田達也, 栗原幸江, 上別府圭子, 平井啓. 「終末期がん患者の家族が大事にしたいと思うこと」の概念化: 一般集団・遺族 1975 名を対象とした全国調査の結果から. 第15回日本緩和医療学会学術集会, 2010年6月18日-19日, 東京都.

三條真紀子，宮下光令，森田達也，栗原幸江，出野美那子，恒藤暁，志真泰夫，平井啓。「終末期がん患者の家族が大事にしたいと思うこと」の構成要素：家族と遺族を対象とした面接調査の結果から．第 15 回日本緩和医療学会学術集会，2010 年 6 月 18 日-19 日，東京都．

三條真紀子，宮下光令，森田達也，佐藤一樹，上別府圭子，恒藤暁，志真泰夫．終末期のがん患者を介護した遺族の介護経験の評価および健康関連 QOL：7994 名の全国調査 J-HOPE STUDY．第 15 回日本緩和医療学会学術集会，2010 年 6 月 18 日-19 日，東京都．

三條真紀子，塩崎麻里子，吉田沙蘭，森田達也，宮下光令，上別府圭子，恒藤暁，志真泰夫，平井啓．ホスピス・緩和ケア病棟への入院検討時の家族のつらさと望ましい支援に関する質的研究：遺族への面接調査の結果から．第 15 回日本緩和医療学会学術集会，2010 年 6 月 18 日-19 日，東京都．

三條真紀子，森田達也，宮下光令，佐藤一樹，恒藤暁，志真泰夫，家族の視点から見た望ましい緩和ケアシステム：J-HOPE-study．第 15 回日本緩和医療学会学術集会，2010 年 6 月 18 日-19 日，東京都．

牟田理恵子，三條真紀子，宮下光令，若林理恵子，安藤悦子，森田達也，恒藤暁，志真泰夫．緩和ケア病棟の遺族は追悼会や死別後の手紙をどうとらえているか？：44 名のインタビュー調査．第 15 回日本緩和医療学会学術集会，2010 年 6 月 18 日-19 日，東京都．

山崎あけみ．家族支援を考える中堅看護職のための院内教育プログラムー施設教育委員へのヒアリング調査ー．第 20 回日本看護学教育学会学術集会，2010 年 7 月 31 日-8 月 1 日，大阪府大阪市．

宮崎博子，藤城富美子，多屋馨子，山本弘江，西垣佳織，上別府圭子．保育所の人的環境としての看護師等配置状況と役割(1)ー看護師等配置の有無による保健活動の違いー．第 57 回日本小児保健学会，2010 年 9 月 16 日-18 日，新潟県新潟市．

藤城富美子，宮崎博子，多屋馨子，山本弘江，西垣佳織，上別府圭子．保育所の人的環境としての看護師等配置状況と役割(2)ー慢性疾患とアレルギーのある子への対応ー．第 57 回日本小児保健学会．2010 年 9 月 16 日-18 日，新潟県新潟市．

藤城富美子，宮崎博子，多屋馨子，国分麻紀，村山志保，上別府圭子．保育所の人的環境としての看護職配置状況と役割(2)ー慢性疾患児と感染症対策への課題ー．第 16 回日本保育園保健学会，2010 年 10 月 30 日-31 日，大阪府吹田市．

宮崎博子，藤城富美子，国分麻紀，村山志保，上別府圭子．保育所の人的環境としての看護職配置状況と役割(1)－看護職の雇用形態による保健活動への意識、担当状況の違い－．第16回日本保育園保健学会，2010年10月30日-31日，大阪府吹田市．

国分麻紀，山本弘江，上別府圭子．妊娠期における夫婦の性生活に対する意識と親意識の関連．第51回日本母性衛生学会学術集会，2010年11月5日-6日，石川県金沢市

河原智江，西村ユミ，池田真理，林由美，渡辺陽子，塩田藍．認知症介護者のウェブログを通じた“つながり”の経験と意義（第1報）．第7回日本質的心理学会学術集会，2010年11月27日-28日，茨城県水戸市

佐藤伊織，樋口明子，柳澤隆昭，武笠晃丈，井田孔明，澤村豊，杉山一彦，斉藤延人，隈部俊宏，寺崎瑞彦，西川亮，石田也寸志，上別府圭子．脳腫瘍を持つ子どもの健康関連 QOL 測定：自己評価と保護者評価それぞれへの関連要因．第28回日本脳腫瘍学会学術集会，2010年11月28日-30日，長野県北佐久郡軽井沢町．

佐藤伊織，樋口明子，柳澤隆昭，武笠晃丈，井田孔明，澤村豊，杉山一彦，斉藤延人，隈部俊宏，寺崎瑞彦，西川亮，石田也寸志，上別府圭子．脳腫瘍を持つ子どもとその保護者が関心を持つ心理社会的予後の要素．第26回日本小児がん学会，2010年12月17日-19日，大阪府大阪市．

東樹京子，山本光映，佐藤伊織，三井千佳，野中らいら，村山志保，吉川久美子，上別府圭子．小児がん患児の復学支援－感染症に対する看護師からの情報提供－．第8回日本小児がん看護学会学術集会，2010年12月17日-19日，大阪府大阪市．

講演・シンポジウムなど

上別府圭子．（司会）医療安全活動の現状と課題．日本予防医学リスクマネジメント学会 関東地方会 2009，2009年4月25日，東京都文京区．

上別府圭子．（講演）産後うつ母親への支援－EPDS を用いた取り組み－，テーマ別研修会 2「児童虐待の予防と発見」．社会福祉法人 恩賜財団 母子愛育会 総合母子保健センター，2009年6月4日，東京都港区．

上別府圭子．（講演）エジンバラ産後うつ病質問表（EPDS）の正しい理解【基礎編】．横浜市都筑区保健センター主催「産後うつ対策事業会議」，2009年7月13日，神奈川県横浜市．

上別府圭子. (指定発言) 最前線で子どもの健康を守る保育園看護師からの発言. 日本小児看護学会第 19 回学術集会 交流セッション 3, 2009 年 7 月 18 日-19 日, 北海道札幌市.

上別府圭子. (講演) EPDS 導入の意義や EPDS の活用方法の理解. 乳幼児虐待予防対策事業「産後うつに関する研修会」, 2009 年 7 月 29 日, 新潟県十日町市.

山崎あけみ, 中島和子, 峰博子, 上別府圭子. 現任教育において家族とのパートナーシップを学ぶ(テーマセッション). 第 16 回日本家族看護学会学術集会, 2009 年 9 月 5 日-6 日, 岐阜県.

山崎あけみ. いま、医療職が家族にできること—家族看護学の視点から考える—. 第 5 回首都圏ネオフォーラム, 2010 年 9 月 18 日, 東京都.

上別府圭子. (ポスターセッション) 摂食障害 2. 第 50 回日本児童青年精神医学会総会, 2009 年 9 月 30 日-10 月 2 日, 京都府京都市.

上別府圭子. (司会) 土居健郎先生を偲ぶ会, 2009 年 10 月 12 日, 東京都新宿区.

杉下佳文. 周産期メンタルヘルスに関するスクリーニングの重要性. 新潟県十日町助産師職能研修会, 2009 年 11 月 14 日, 新潟県十日町市.

上別府圭子. (司会) セッション 1. 第 25 回日本精神衛生学会大会, 2009 年 11 月 14 日-15 日, 東京都清瀬市.

杉下佳文. 周産期メンタルヘルスと育児支援システム. 東京都助産師教育指導講習会, 2009 年 11 月 19 日, 東京都.

上別府圭子 (企画・座長) 胎児期からの虐待予防における支援—医療機関における早期介入を考える—. 日本子ども虐待防止学会第 15 回学術集会埼玉大会 分科会 II-9, 2009 年 11 月 27 日-28 日, 埼玉県さいたま市.

杉下佳文. 全国調査からみた胎児虐待予防の現状と課題. 日本子ども虐待防止学会第 15 回学術集会分科会, 2009 年 11 月 27 日-28 日, 埼玉県.

栗原佳代子. 先進的医療機関システムからみた妊娠期からの虐待予防. 日本子ども虐待防止学会第 15 回学術集会分科会, 2009 年 11 月 27 日-28 日, 埼玉県さいたま市.

杉下佳文，本間真紀，栗原佳代子，森本俊子，上別府圭子．胎児期からの虐待予防における支援－医療機関における早期介入を考える－話題提供「全国調査からみた胎児虐待予防の現状と課題」．日本子ども虐待防止学会第15回学術集会埼玉大会分科会，2009年11月27日-28日，埼玉県さいたま市．

上別府圭子．（座長）復学支援2．第7回日本小児がん看護学会，2009年11月28日，千葉県浦安市．

上別府圭子．（座長）「終末期を支えるケア」．第15回日本臨床死生学会大会，2009年12月5日-6日，東京都文京区．

上別府圭子．小児がん患者のスムーズな復学のための準備的研究．厚生労働省科学研究補助金 がん臨床研究事業 真部班主催 公開シンポジウム，2010年2月11日，東京都中央区．

上別府圭子．（総合司会）メンタルヘルスの集い．第24回日本精神保健会議，2010年3月6日，東京都．

上別府圭子，嶋津岳士．（パネルディスカッション司会）チーム医療と医療安全．第8回日本予防医学リスクマネジメント学会学術集会，2010年3月11日-12日，東京都．

上別府圭子．看護師等の全国配置と保健活動の質向上を目指して－「保育所の環境整備に関する調査」結果報告から－．子どもの健康を守るためにしなければならないこと 第1分科会 保育所看護師の役割を考える．社会福祉法人日本保育協会/日本保育園保健協議会平成21年度保育所保育・保健推進セミナー，2010年3月13日-14日，東京都．

上別府圭子，飯田順三．（シンポジウム司会）ライフステージと発達障害のサイコセラピー．第11回日本サイコセラピー学会，2010年3月20日-21日，奈良県．

上別府圭子．周産期のメンタルヘルスについて－産後うつ病を中心に－．柏市民健康づくり推進員連絡協議会研修会，2010年4月28日，千葉県柏市．

上別府圭子．子どものQuality of Lifeを測定する．こころの発達と障害の教育研究コンソーシアム 第1回ワークショップ，2010年5月9日，東京都文京区．

星順隆，上別府圭子．（助言者）第3分科会 保育・教育．（財）がんの子供を守る会 平成22年度定期総会，2010年6月13日，東京都千代田区．

上別府圭子. (座長) 医療事故の心理学ー心理学の視点から考える平時対応, 事故後対応および事故後サポート. 医療安全基礎講座 2010, 国際予防医学リスクマネジメント連盟, 2010 年 6 月 24 日, 東京都文京区.

上別府圭子. 小児がん経験者の心理社会的健康についてー厚労省の横断的調査結果よりー. 平成 22 年度がんの子供を守る会 新潟支部第 29 回定期総会, 2010 年 7 月 11 日, 新潟県新潟市.

上別府圭子. (座長) 看護における危機介入ー医療安全の先端技術ー. 国際予防医学リスクマネジメント連盟 医療安全教育セミナー 2010 夏季 (日本語社会人教育プログラム)ー医療安全の能力向上ー, 2010 年 8 月 4 日-6 日, 東京都文京区.

山崎あけみ. いま 医療職がご家族に出来ること. 第 5 回首都圏新生児フォーラム 特別講演, 2010 年 9 月 18 日, 東京都千代田区.

上別府圭子. (座長) クリティカルケアにおける家族看護他. 日本家族看護学会第 17 回学術集会, 2010 年 9 月 18 日-19 日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子. 産後うつ病の気づきと親支援について (エジンバラ入門編). 目黒区碑文谷保健センター 職場研修, 2010 年 9 月 22 日, 東京都目黒区.

上別府圭子. 小児がん患者をとりまく環境: 児童生徒・担任・学校長の意識からニーズを探る. 第 10 回中部小児がんトータルケア研究会, 2010 年 10 月 2 日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子. 産後うつ病の早期ケアと虐待の予防. 公益財団法人 SBI 子ども希望財団 公開講座「気づく・救う・防ぐー子どもの虐待ー2010」, 2010 年 10 月 26 日, 神奈川県横浜市.

上別府圭子. (指定討論) 総合病院精神医学ー多職種との連携. 第 23 回日本総合病院精神医学会総会, 2010 年 11 月 26 日-27 日, 東京都千代田区.

河原智江, 西村ユミ, 池田真理, 林由美, 渡辺陽子, 塩田藍. 対人サービス専門家による「大事なひとを喪くした家族」支援を再考する (会員企画シンポジウム). 第 7 回日本質的心理学学会学術集会, 2010 年 11 月 27 日, 茨城県水戸市.

上別府圭子（企画代表者）、杉下佳文（企画代表者）．医療機関に求められる保健・福祉との連携－１次予防を含めて－（分科会）．日本子ども虐待防止学会第 16 回学術集会，2010 年 11 月 27-28 日，熊本県熊本市．

栗原佳代子．医療機関に求められる保健・福祉との連携 医療機関の取り組み．日本子ども虐待防止学会第 15 回学術集会，2010 年 11 月 27 日-28 日，熊本県熊本市．

上別府圭子．人材育成における教育効果についての研究報告 産後うつ病の早期発見・早期ケアと乳児虐待予防のための保健師教育プログラムの評価．周産期メンタルヘルス研究連絡会議，2010 年 12 月 11 日-12 日，福岡県福岡市．

上別府圭子．PTG 量的研究．PTG 勉強会，2010 年 12 月 26 日，東京都中央区．

當山紀子．こんにちは赤ちゃん事業に期待される育児支援．第二回こんにちは赤ちゃん事業研修会，2011 年 2 月 2 日，静岡県静岡市．

小林京子．小児がんの子どもと家族の思い－家族支援の大切さ・QOL を高めるために－．がんの子供を守る会（のぞみ会）静岡市部東部分会，2011 年 2 月 26 日，静岡県沼津市．

三井千佳．小児がん患者のスムーズな復学のために－青年期経験者の自己開示に焦点を当てて－．公開シンポジウム：小児がん患者・家族および子育て世代のがん患者・家族への支援を考える，厚生労働省科学研究補助金 がん臨床研究事業 真部班主催 公開シンポジウム，2011 年 2 月 11 日，東京都中央区．

上別府圭子．入所する子どもの保護者に対する支援および看護師の役割．乳幼児の健康向上セミナー シンポジウム「保育保健の課題と展望」 日本保育協会，2011 年 3 月 10 日，東京都渋谷区．

上別府圭子．乳幼児の健やかな育ちのために：看護師等の配置の意義．乳幼児の健康向上セミナー 分科会：保育所における看護師の役割 日本保育協会，2011 年 3 月 11 日，東京都渋谷区．

上別府圭子．児童虐待の予防・早期発見・早期ケア．第 9 回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会，2011 年 3 月 17 日-18 日，福岡県福岡市．

杉下佳文. 産科の立場から パネルディスカッション 児童虐待の予防・早期発見・早期ケア. 第9回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会, 2011年3月17日-18日, 福岡県福岡市.

上別府圭子. エジンバラ産後うつ病質問票 EPDS の使い方ー虐待予防と子育て支援ー. 台東区台東保健所, 2011年3月23日, 東京都台東区.

一般雑誌・新聞その他

上別府圭子. (提言) 家族ライフサイクル論を見直す, 家族看護学研究. 2010; 16(2): 45.

上別府圭子. (エッセイ) 高野和明著「幽霊人命救助隊」. 死生学 2010; 25: 3.

上別府圭子. (書評) 上田礼子著「子ども虐待予防の新たなストラテジー」. 保健師ジャーナル. 2010; 66(1): 79.

上別府圭子. (監修)

がんナビ: 親のがんについて <http://cancernavi.nikkeibp.co.jp/>. あなたとともにーがん患者を支えるためのガイド, 日系 BP 社 2009; (原書: National Cancer Institute. When Your Parent Has Cancer – A Guide for Teens [e-books]. National Institutes of Health, U.S. Department of Health and Human Services; 2005 Sep [cited 2009 Dec 10]. Available from:

<http://www.cancer.gov/cancertopics/When-Your-parent-has-cancer-guide-for-teens/pdf> <http://cancer>, 日系 BP 社 2009.

上別府圭子. (監修)

がんナビ: きょうだいのがんについて <http://cancernavi.nikkeibp.co.jp/>. あなたとともにーがん患者を支えるためのガイド, 日系 BP 社 2010; (原書: National Cancer Institute. When Your Parent Has Cancer – A Guide for Teens [e-books]. National Institutes of Health, U.S. Department of Health and Human Services; 2005 Sep [cited 2009 Dec 10]. Available from:

<http://www.cancer.gov/cancertopics/When-Your-parent-has-cancer-guide-for-teens/pdf> <http://cancer>, 日系 BP 社 2009.

上別府圭子. (取材協力) 第10回日本サイコセラピー学会 先端医療におけるサイコセラピーの役割を紹介. Medical Tribune. 2009; 42(26): 28.

上別府圭子. 土居健郎先生をしのぶ. 同窓会ニューズレター. 2010; 33: 5.

Kamibeppu, K. Saved souls just before the end of lives. Death and Life Studies. 2010; No. 24-25: 5.

上別府圭子. 分科会報告. 財がんの子供を守る会ニューズレター のぞみ. 2010; 162: 2.

上別府圭子. 書評『ナラティブ・エクスポージャー・セラピー - 人生史を語るトラウマ治療 - 』マギー・シャウアー他著. 児童青年精神医学とその近接領域. 2010; 51(3): 172-173.

上別府圭子. 祝 第 100 号!. 東京都看護協会東部地区支部 地区支部ニュース. 2010; 100.

上別府圭子. 巻頭のことは 児童虐待にかかわる保健師を養成し支援する. 保健の科学. 2010; 52(22): 721.

上別府圭子. あとがき. 保健の科学. 2011; 53(1): 72.

杉下佳文. (書評) 上田礼子著「子ども虐待予防の新たなストラテジー」. 看護実践の科学. 2010; 35(5): 92.

社会活動

上別府圭子. (コメンテーター) 看護研究. 平成 21 年度 東京都立大塚病院看護部院内研修 専門コース, 2009 年 12 月 4 日, 東京都豊島区.

上別府圭子. (コメンテーター) 第 19 回 看護研究・実践報告会. 東京都看護協会東部地区支部看護研究委員会, 2010 年 2 月 13 日, 東京都文京区.

山崎あけみ. NTT 関東病院院内研修 ステップ III がん看護 第 7 回「家族看護」. NTT 関東病院院内研修, 2010 年 12 月 6 日, 東京都.

山崎あけみ. 日本看護協会神戸研修センター 家族ケアを考える. 日本看護協会神戸研修センター, 2011 年 2 月 16 日, 兵庫県神戸市.

上別府圭子. (コメンテーター) 平成 22 年度東京都看護協会東部地区支部 看護研究・看護報告会. 2011 年 2 月 19 日, 東京都文京区.

栗原佳代子. 周産期のメンタルヘルスと虐待防止. 横浜市栄区育児不安解消事業研修会, 横浜市栄区役所, 2011 年 3 月 7 日, 神奈川県横浜市.

受賞

西垣佳織，黒木晴郎，江川文誠，上別府圭子．自宅で生活する重症心身障害児主介護者のレスパイトケア(RC)利用に関連する要因．

第 19 回日本外来小児科学会年次集会，2009 年 8 月 28 日-30 日，埼玉県さいたま市．

優秀演題賞受賞

三條真紀子，宮下光令，森田達也，栗原幸江，上別府圭子，平井啓．「終末期がん患者の家族が大事にしたいと思うこと」の概念化：一般集団・遺族 1975 名を対象とした全国調査の結果から．第 15 回日本緩和医療学会学術集会，2010 年 6 月 18 日-19 日，東京都．

優秀演題賞受賞

1-2. 研究費

平成 21 年度

厚生労働省科学研究費補助金（がん臨床研究事業）「働き盛りや子育て世代のがん患者やがん経験者，小児がんの患者を持つ家族支援のあり方についての研究」（課題番号 H20-がん臨床-一般 001 真部班:分担研究者 上別府圭子），2000 千円

真部淳，細谷亮太，小澤美和，的場元弘，押川真喜子，鈴木伸一，小田慈，上別府圭子，堀部敬三

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)，「看護理工学を基盤としたトランスレーショナルリサーチシステムの構築とその評価」（課題番号 19209065），670 千円

真田弘美，数間恵子，菅田勝也，柴木実枝，上別府圭子，春名めぐみ

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)，「周産期からの虐待予防を実現する家族看護技術の確立と医療連携システムモデルの構築」（課題番号 21390589），5070 千円

上別府圭子，山下洋

文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究，「成育医療的視点での家族支援に向けた包括的調査による小児脳腫瘍患児・家族の実態解明」（課題番号 21659516），500 千円

上別府圭子

文部科学研究費補助金 基盤研究(C)，「家族支援を考える中堅看護職のための院内教育プログラム開発」（研究課題番号 21592687），1300 千円

山崎あけみ

財団法人 メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「妊娠初期の情報提供が産後うつに及ぼす影響」，300 千円

杉下佳文，上別府圭子

文部科学省科学研究費補助金 若手研究(B)，「病児・障害児を含めた家族の健康支援の評価に役立つ測定用具の開発」（課題番号 20791723），1223 千円

村山志保

公益信託 山路ふみ子専門看護教育研究助成「産後うつ予防のための妊娠期からの介入プログラムに関する研究」, 1000 千円

池田真理

財団法人 がんの子供を守る会治療研究助成「脳腫瘍患児・家族の心理社会的実態解明に向けた当事者の関心（心配）の明確化」, 500 千円

佐藤伊織, 上別府圭子, 樋口明子, 石田也寸志, 西川亮

文部科学研究費補助金 若手研究(B)「病児・障害児を含めた家族の健康支援の評価に役立つ測定用具の開発」(研究課題番号 20791723), 1223 千円

村山志保

財団法人 精神・神経科学振興財団「精神疾患を有する親と家族への支援プログラムの開発に関する研究」, 500 千円

上野里絵

平成 22 年度

厚生労働省科学研究費補助金 (がん臨床研究事業), 「働き盛りや子育て世代のがん患者やがん経験者, 小児がんの患者を持つ家族支援の在り方についての研究」(課題番号 H20-がん臨床-一般 001 真部班: 分担研究者 上別府圭子), 500 千円

真部淳, 細谷亮太, 小澤美和, 的場元弘, 押川真喜子, 鈴木伸一, 小田滋, 上別府圭子, 堀部敬三

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A), 「看護理工学を基盤としたトランスレーショナルリサーチシステムの構築とその評価」(課題番号 19209065), 780 千円

真田弘美, 数間恵子, 菅田勝也, 柴木実枝, 上別府圭子, 春名めぐみ

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B), 「周産期からの虐待予防を実現する家族看護技術の確立と医療連携システムモデルの構築」(課題番号 21390589), 5460 千円

上別府圭子, 山下洋

文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究, 「成育医療的視点での家族支援に向けた包括的調査による小児脳腫瘍患児・家族の実態解明」(課題番号 21659516), 2000 千円

上別府圭子

財団法人 大同生命厚生事業団地域保健福祉研究助成, 「臨床研究コーディネータの職業性ストレスに関する実態調査と地域による特徴の検討」, 300 千円

松本和史, 角野久美子, 長村文孝, 上別府圭子

文部科学省科学研究費補助金 若手研究(B), 「医療機関における妊娠期・胎児期からの虐待予防を目的としたスクリーニングの開発」(課題番号 22792216), 1040 千円

杉下佳文

文部科学省科学研究費補助金 若手研究(B), 「病児・障害児を含めた家族の健康支援の評価に役立つ測定用具の開発」(課題番号 20791723), 1170 千円

村山志保

財団法人 がんの子供を守る会治療研究助成 「PedsQL 基準範囲の作成: 頭蓋内胚細胞腫瘍患者の治療中・治療後の QOL」, 1000 千円

佐藤伊織, 上別府圭子, 樋口明子, 松谷雅生, 西川亮, 柳澤隆昭

公益信託 山路ふみ子専門看護教育研究助成 「小児期に脳腫瘍を経験した青少年の長期フォローアップに向けて: 身体機能・認知機能および環境・個人要因が心理社会的困難や QOL に与える影響」, 1000 千円

佐藤伊織

第 19 回ファイザーヘルスリサーチ振興財団国内共同研究 (満 39 歳以下) 研究助成 「小児 ALL 治療プロトコール評価: 病児と家族の QOL の縦断研究」, 940 千円

小林京子, 山口悦子

財団法人 メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金 「思春期がん経験者の病気開示の実態と QOL に関する研究」, 400 千円

三井千佳, 上別府圭子, 山崎あけみ, 牛島定信

1-3. 学内外の公的活動

上別府圭子

日本精神衛生学会 常任理事 (2003 年～)

日本精神衛生会「心と社会」編集委員 (2003 年～)

日本児童青年精神医学会 教育に関する委員会委員 (2007 年 4 月～2012 年 3 月 31 日)

日本児童青年精神医学会 医療心理師国家資格検討委員会委員
(2007 年 11 月～2012 年 3 月 31 日)

日本看護科学学会 評議員 (2007 年 12 月～2011 年)

日本小児白血病リンパ腫研究グループ (JPLSG) 倫理委員会委員 (外部委員)
(2008 年 4 月～2012 年 3 月 31 日)

神戸大学大学院保健学研究科 非常勤講師 (2009 年 4 月～2011 年 2 月 28 日)

日本小児保健協会 代議員 (2009 年 10 月 25 日～2011 年秋)

雑誌「保健の科学」編集委員 (2010 年 4 月～)

日本家族看護学会理事 (2010 年 4 月～2013 年 3 月)

日本保育協会 保育所保育セミナー企画委員 (2010 年 7 月～2011 年 3 月 31 日)

日本保育協会 乳幼児の健康向上セミナー企画委員 (2010 年 7 月～2011 年 3 月 31 日)

柏市保健衛生審議会母子保健専門分科会委員 (2010 年 10 月 21 日～2012 年 10 月 20 日)

特定非営利活動法人 日本小児がん看護学会 理事 (2011 年 1 月 1 日～2012 年 12 月 31 日)

山崎あけみ

日本看護科学学会 平成 22 年度 表彰論文選考委員会委員 (2010 年)

日本家族看護学会 平成 22-24 年度 編集委員会委員 (2010 年)

2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）

平成 21 年度

卒業論文

国分麻紀：

妊娠期における夫婦の親意識の関連要因 ―関係性に注目して―

修士論文

大塚寛子：

高校生の月経前愁訴に関する研究

東樹京子：

小児がん患者の復学支援 ―感染症に対する看護師からの情報提供―

野中らいら：

小児がん患者の復学に関する学校長の意識

平成 22 年度

卒業論文

松原由季：

保育所感染症対策における看護職の専門性と認識する課題

修士論文

三井千佳：

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示

渡邊栄美：

家族看護態度調査票(The Families' Importance in Nursing Care- Nurses' Attitudes: FINC-NA)
の日本語版開発

博士論文

池田真理：

妊婦のアタッチメント・スタイルが産後うつ病発症に及ぼす影響に関する研究

3. 教室カンファレンス

平成 21 年度

4 月 14 日

池田真理（論文抄読）

Okano T, Nagata S, Hasegawa M, Nomura J, Kumar R. Effectiveness of antenatal education about postnatal depression: a comparison of two groups of Japanese mothers. J Ment Health. 1998;7(2):191-198.

Deave T, Johnson D, Ingram J. Transition to parenthood: the needs of parents in pregnancy and early parenthood. BMC Pregnancy Childbirth. 2008;8(30):1-11.

大塚寛子（研究発表）

高校生の月経前症候群（PMS）の認識と月経セルフケアに関連する要因～高校生を対象とした月経セルフケア・PMS（月経前症候群）に関する教育プログラム実施に向けての基礎調査～

4 月 21 日

東樹京子（論文抄読）

Katz ER, Varni JW, Rubenstein CL, Blew A, Hubert N. Teacher, parent, and child evaluative ratings of a school reintegration intervention for children with newly diagnosed cancer. Child Health Care. 1992;21(2):69-75.

西垣佳織（研究発表）

在宅重症心身障害児主介護者のレスパイトケア利用が家族に与える心理社会的影響の検討

4 月 28 日

大塚寛子（論文抄読）

Chau JPC, Chang AM. Effects of an educational programme on adolescents with premenstrual syndrome. Health Educ Res. 1999;14(6):817-830.

池田真理（研究発表）

産後うつ発症に関連する心理社会的要因に関する研究

5 月 12 日

小町美由紀（論文抄読）

Stayt LC. Nurses' experiences of caring for families with relatives in intensive care units. J Adv Nurs. 2007;57(6):623-630.

東樹京子（研究発表）

小児がん患児の復学支援に関わる看護師の支援の実態と看護アセスメントにおけるデータ収集項目の明確化（仮）

5 月 19 日

陳俊霞（論文抄読）

Musil CM, Warner CB, Zauszniewski JA, Jeanblanc AB, Kercher K. Grandmothers, caregiving, and family functioning. J Gerontol. 2006;61B(2):89-98.

佐藤伊織（研究発表）

小児脳腫瘍患者の QOL 調査

5 月 26 日

當山紀子（論文抄読）

Griffin DK, Verzemnieks IL, Anderson NLR, Brecht ML, Lesser J, Kim Sue, et al. Nurse visitation for adolescent mothers. Nurs Res. 2003;52(2):127-136.

小町美由紀（研究発表）

クリティカル領域における看護師・家族の心理状態について～看護師の 2 次的外傷性ストレスを中心に～

6 月 2 日

佐藤伊織（論文抄読）

Gerhardt CA, Vannatta K, Valerius KS, Correll J, Noll RB. Social and romantic outcomes in emerging adulthood among survivors of childhood cancer. J Adolesc Health. 2007;40(5):9-15.

陳俊霞（研究発表）

孫の養育への参加が祖父母の Well-being 及び家族機能に及ぼす影響の検討（仮）

6 月 9 日

東樹京子（論文抄読）

Chiang YC, Yeh CH, Wang KWK, Yang CP. The experience of cancer-relates fatigue in Taiwanese children. Eur J Cancer Care. 2009;18(1):43-49.

當山紀子（話題提供・研究発表）

健やか親子 21 が看護職の活動に与えた影響とその関連要因に関する研究～妊娠中から子育てまでの支援について～

6 月 16 日

三井千佳（論文抄読）

Moore JB, Kaffenberger C, Goldberg P, Oh KM, Hudspeth R. School reentry for children with cancer: perceptions of nurses, school personnel, and parents. J Pediatr Oncol Nurs. 2009;26(2):86-99.

大塚寛子（研究発表）

高校生の性周期に伴う愁訴と月経前および月経中の心身のイメージに関連する要因～高校生を対象とした月経セルフケア・PMS（月経前症候群）に関する教育プログラム実施に向けての基礎調査～

6 月 23 日

西垣佳織（論文抄読）

Williams PD, Williams AR, Graff JC, Hanson S, Stanton A, Hafeman C, et al. Interrelationships among variables affecting well siblings and mothers in families of children with a chronic illness or disability. J Behav Med. 2002;25(5):411-424.

東樹京子（研究発表）

小児がん患児の復学支援における話し合いの実態と話し合いの実施を促進する要因

6 月 30 日

渡邊栄美（論文抄読）

Herth K. Abbreviated instrument to measure hope: development and psychometric evaluation. J Adv Nurs. 1992;17(10):1251-1259.

三井千佳（研究発表）

思春期がん患者の学校生活への適応と健康な友人からのサポートとの関連（仮）

7月7日

池田真理（論文抄読）

Monk C, Leight KL, Fang Y. The relationship between women's attachment style and perinatal mood disturbance: implications for screening and treatment. Arch Womens Ment Health. 2008;11(2):117-129.

渡邊栄美（話題提供）

研究テーマの探索：印象に残る臨床経験

7月14日

岡部花枝（論文抄読）

Park SG, Min KB, Chang SJ, Kim HC, Min JY. Job stress and depressive symptoms among Korean employees: the effects of culture on work. Int Arch Occup Environ Health. 2009;82(3):397-405.

国分麻紀（研究発表）

親意識と夫婦関係に関する調査～性生活に着目して～

9月1日

東樹京子（論文抄読）

Bruce BS, Chapman A, MacDonald A, Newcombe J. School experiences of families of children with brain tumors. J Pediatr Oncol Nurs. 2008;25(6):331-339.

池田真理（研究発表）

産後うつ発症に関連する心理社会的要因に関する研究

9月8日

大塚寛子（論文抄読）

Wilson CA, Keyes C, Keyes W. A survey of adolescent dysmenorrhea and premenstrual symptom frequency: A model program for prevention, detection and treatment. J Adolesc Health Care. 1989;10(4):317-322.

西垣佳織（研究発表）

在宅重症心身障害児主介護者のレスパイトケア利用に関する研究

9 月 15 日

三井千佳（論文抄読）

Varni JW, Katz ER, Colegrove R, Dolgin M. Perceived social support and adjustment of children with newly diagnosed cancer. J Dev Behav Pediatr. 1994;15(1):20-26.

佐藤伊織（研究発表）

小児脳腫瘍経験者の健康関連 QOL

9 月 29 日

渡邊栄美（論文抄読）

Morris ME, Grant M, Lynch JC. Patient-reported family distress among long-term cancer survivors. Cancer Nurs. 2007;30(1):1-8.

陳俊霞（研究発表）

孫の養育への参加が祖父母の Well-being 及び家族機能に及ぼす影響の検討

10 月 6 日

野中らいら（論文抄読）

Moore IM, Challinor J, Pasvogel A, Matthay K, Hutter J, Kaemingk K. Behavioral adjustment of children and adolescents with cancer: teacher, parent, and self-report. Oncol Nurs Forum. 2003;30(5):84-91.

小町美由紀（研究発表）

クリティカル領域における看護師・家族の心理状態と認識の違いについて

10 月 13 日

池田真理（論文抄読）

Bussel JCH, Spitz B, Koen D. Depressive symptomatology in pregnant and postpartum women. An exploratory study of the role of maternal antenatal orientations. Arch Womens Ment Health. 2009;12(3):155-166.

東樹京子（研究発表）

小児がん患者の復学支援における話し合いの実態と看護アセスメント

10 月 20 日

西垣佳織（論文抄読）

Arai Y, Sugiura M, Miura H, Washio M, Kudo K. Undue concern for others' opinions deters caregivers of impaired elderly from using public services in rural Japan. *Int J Geriatr Psychiatry*. 2000;15(10):961-968.

大塚寛子（研究発表）

高校生の性周期に伴う愁訴と月経前および月経中の心身イメージに関連する要因

11 月 10 日

佐藤伊織（論文抄読）

Sanderson K, Nicholson J, Graves N, Tilse E, Oldenburg B. Mental health in the workplace: using the ICF to model the prospective associations between symptoms, activities, participation and environmental factors. *Disabil and Rehabil*. 2008;30(17):1289-1297.

小林京子（研究発表）

小児急性リンパ性白血病の治療と患児・家族の特徴

11 月 17 日

陳俊霞（論文抄読）

Wei-Qun LV, Chi I. Measuring grandparenthood stress and reward: Developing a scale based on perceptions by grandparents with adolescent grandchildren in Hong Kong. *Geriatr Gerontol Int*. 2008;8(4):291-299.

野中らいら（研究発表）

小児がん患児の復学に対する学校長・特別支援教育コーディネーターの意識・態度・ニーズ

11 月 24 日

小町美由紀（論文抄読）

Lautrette A, Darmon M, Megarbane B, Joly LM, Chevret S, Adrie C, et al. A communication strategy and brochure for relatives of patients dying in the ICU. *N Engl J Med*. 2007;356(5):469-78.

三井千佳（研究発表）

思春期がん経験者の QOL と関連要因に関する研究

12月1日

當山紀子（論文抄読）

Kronborg H, Vath M, Olsen J, Harder I. Health visitors and breastfeeding support: influence of knowledge and self-efficacy. Eur J Public Health. 2007;18(3):283-8.

渡邊栄美（研究発表）

がん術後患者の家族の QOL とソーシャルサポートについて

12月8日

東樹京子（研究発表）

小児がん患者の復学支援

大塚寛子（研究発表）

高校生の月経前および月経中の心身のイメージに関する研究

12月15日

大塚寛子（研究発表）

高校生の月経前の愁訴に関する研究

野中らいら（研究発表）

小児がん患者の復学に関する学校長・特別支援教育コーディネーターの意識

国分麻紀（研究発表）

親意識と夫婦関係に関する調査

1月5日

東樹京子（研究発表）

小児がん患者の復学支援

野中らいら（研究発表）

小児がん患者の復学に関する学校長の意識

1月19日

東樹京子（修士論文発表準備）

小児がん患者の復学支援

大塚寛子（修士論文発表準備）

高校生の月経前愁訴に関する研究

野中らいら（修士論文発表準備）

小児がん患者の復学に関する学校長の意識

1月26日

東樹京子（修士論文発表準備）

小児がんの子どもの復学支援

大塚寛子（修士論文発表準備）

高校生の月経前愁訴に関する研究

野中らいら（修士論文発表準備）

小児がん患者の復学に関する学校長の意識

2月2日

津村明美（研究発表）

患者・家族の現状認識の査定と5つの看護方略を用いた終末期の悪性グリオーマ患者・
家族への看護過程の検証

国分麻紀（研究発表）

妊娠期の夫婦の親意識の関連要因

2月16日

佐藤伊織（論文抄読）

Penn A, Lowis SP, Stevens MCG, Hunt LP, Shortman RI, MaCarter RJ, et al. Family,
demographic and illness-related determinants of HRQL in children with brain tumors in the first
year after diagnosis. *Pediatr Blood Cancer*. 2009;53(6):1092-1099.

3月2日

小林京子（論文抄読）

Stevens B, Croxford R, McKeever P, Yamada J, Booth M, Daub S, et al. Hospital and home
chemotherapy for children with leukemia: A randomized cross-over study. *Pediatr Blood
Cancer*. 2006;47(3):285-292.

池田真理（研究発表）

産後うつ発症に関連する心理社会的要因に関する研究

3 月 9 日

小町美由紀（論文抄読）

Paparrigopoulos T, Melissaki A, Efthymiou A, Tsekou H, Vadala C, Kribeni G, et al. Short-term psychological impact on family members of intensive care unit patients. J Psychosom Res. 2006;61(5):719-722.

西垣佳織（研究発表）

在宅重症心身障害児主介護者のレスパイトケア利用に関する研究

3 月 16 日

陳俊霞（論文抄読）

Goodman CC. Intergenerational triads in grandparent-headed families. J Gerontol: Social Sciences. 2003;58B(5):281-289.

大川真穂（論文抄読）

Khan A, Lasker SS, Chowdhury TA. Are spouses of patients with type2 diabetes at increased risk of developing diabetes? Diabetes Care. 2003;26(3):710-712.

平成 22 年度

4 月 6 日

西垣佳織（論文抄読）

Kumamoto K, Arai Y, Zarit SH. Use of home care services effectively reduces feelings of burden among family caregivers of disabled elderly in Japan: preliminary results. Int J Geriatr Psychiatry. 2006;21(2):163-170.

三井千佳（研究発表）

思春期がん経験者の病気開示の実態と QOL に関する研究

4 月 13 日

池田真理（論文抄読）

Oppo A, Mauri M, Ramacciotti D, Camilleri V, Banti S, Borri C, Rambelli C. Risk factors for postpartum depression: the role of the Postpartum Depression Predictors Inventory-Revised (PDPI-R). Results from the Perinatal Depression-Research & Screening Unit (PNDRScU) study. Arch Womens Ment Health. 2009;12(4):239-249.

渡邊栄美（研究発表）

外来化学療法を受けている患者の QOL に影響を及ぼす要因

4 月 20 日

三井千佳（論文抄読）

Duggleby W, Cooper D, Penz K. Hope, self-efficacy, spiritual well-being and job satisfaction. J Adv Nurs. 2009;65(11):2376-2385.

陳俊霞（研究発表）

孫の養育への参加が祖父母の Well-being 及び家族機能に及ぼす影響の検討（仮）

4 月 27 日

渡邊栄美（論文抄読）

Whitford HS, Olver IN, Peterson MJ. Spirituality as a core domain in the assessment of quality of life in oncology. Psychooncology. 2008;17(11):1121-1128.

佐藤伊織（研究発表）

小児脳腫瘍経験者の QOL

5 月 11 日

當山紀子（論文抄読）

Brodrigg W, Fallon A, Jackson C, Hegney D. The relationship between personal breastfeeding experience and the breastfeeding attitudes, knowledge, confidence and effectiveness of Australian GP registrars. Matern Child Nutr. 2008;4(4):264-274.

小町美由紀（研究発表）

集中治療室における患者家族の心理状態と家族機能に関する研究

5 月 18 日

佐藤伊織（論文抄読）

Reimers TS, Ehrenfels S, Mortensen EL, Schmiegelow M, Sønderkaer S. Cognitive deficits in long-term survivors of childhood brain tumors: Identification of predictive factors. Med Pediatr Oncol. 2003;40(1):26-34.

小林京子（研究発表）

小児急性リンパ性白血病児と家族に関する研究

5 月 25 日

小林京子（論文抄読）

Maurice-Stam H, Grootenhuis MA, Brons PP, Caron HN, Last BF. Psychosocial indicators of health-related quality of life in children with cancer 2 months after end of successful treatment. J Pediatr Hematol Oncol. 2007;29(8):540-550.

當山紀子（研究発表）

保健師の母乳育児支援の実態とその関連要因に関する研究

6 月 1 日

小町美由紀（論文抄読）

Youngblut JM, Broton D. Mother's mental health, mother-child relationship, and family functioning 3 months after a preschooler's head injury. J Head Trauma Rehabil. 2008;23(2):92-102.

藤岡寛（研究発表）

障害児の家族のエンパワメントに関する研究

6 月 8 日

藤岡寛（論文抄読）

Measuring empowerment in families whose children have emotional disabilities: A brief questionnaire. Rehabilitation Psychology. 1992;37(4):305-321.

西垣佳織（研究発表）

在宅重症心身障害児へのレスパイトケアに関する研究

6 月 15 日

国分麻紀（論文抄読）

Chen JY, Clark MJ. Family function in families of children with Duchenne muscular dystrophy. Fam Community Health. 2007;30(4):296-304.

森下美紀（研究発表）

がん患者家族の予期悲嘆過程を進める要因に関する研究（仮）

6月22日

森下美紀（論文抄読）

Tomarken A, Holland J, Schachter S, Vanderwerker L, Zuckerman E.. Factors of complicated grief pre-death in caregivers of cancer patients. Psychooncology. 2008;17(2):105-111.

大塚寛子（研究発表）

高校生を対象とした「月経前症候群（PMS）のセルフケア」を支援する教育プログラムの開発

6月29日

大野真実（論文抄読）

Ueno R, Kamibeppu K. Narratives by Japanese mothers with chronic mental illness in the Tokyo metropolitan area: their feelings toward their children and perceptions of their children's feelings. J Nerv Ment Dis. 2008;196(7):522-530.

国分麻紀（研究発表）

家族機能の尺度について Family APGAR test の文献レビュー

末次美子（研究発表）

早産児の母親の子供に対するメンタライゼーションに関する研究

7月6日

大野真実（研究発表）

未成年の子をもつ慢性精神疾患患者と家族への育児支援に関する研究（仮）

三井千佳（研究発表）

思春期がん経験者の病気開示の実態と QOL に関する研究

7月13日

池田真理（研究発表）

産後うつ病発症に関連する心理社会的要因に関する研究～アタッチメント・スタイルに焦点を当てて～

9月7日

池田真理（研究発表）

アタッチメント・スタイルが産後うつ発症に与える影響に関する研究

9 月 14 日

渡邊栄美（論文抄読）

Benzein E, Johansson P, Arestedt KF, Berg A, Saveman BI. Families' Importance in Nursing Care: Nurses' Attitudes--an instrument development. J Fam Nurs. 2008;14(1):97-117.

小林京子（研究発表）

維持療法中の病児と家族の QOL、家族機能の経時的な変化及び関連要因に関する研究

9 月 21 日

国分麻紀（論文抄読）

Gardner W, Nutting PA, Kelleher KJ, Werner JJ, Farley T. Does the family APGAR effectively measure family functioning? J Fam Pract. 2001;50(1):19-25.

佐藤伊織（研究発表）

小児脳腫瘍経験者の QOL

9 月 28 日

森下美紀（論文抄読）

Burton AM, Haley WE, Small BJ, Finley MR, Dillinger-Vasille M. Predictors of well-being in bereaved former hospice caregivers: the role of caregiving stressors, appraisals, and social resources. Palliat Support Care. 2008;6(2):149-158.

小町美由紀（研究発表）

集中治療室における患者家族の心理状態と家族機能に関する研究

10 月 5 日

三井千佳（研究発表）

思春期がん経験者の病気開示の実態と QOL に関する研究

渡邊栄美（研究発表）

看護ケアにおける家族の大切さに関する研究～家族看護尺度の日本語版開発～

10 月 26 日

大野真実（論文抄読）

Korhonen T, Vehviläinen-Julkunen K, Pietilä AM. Do nurses support the patient in his or her role as a parent in adult psychiatry? A survey of mental health nurses in Finland. Arch Psychiatr

Nurs. 2010;24(3):155-167.

當山紀子（研究発表）

保健師の母乳育児支援の実態とその関連要因に関する研究

11月2日

佐藤伊織（論文抄読）

Olson R, Hung G, Bobinski MA, Goddard K. Prospective evaluation of legal difficulties and quality of life in adult survivors of childhood cancer. *Pediatr Blood Cancer*. 2011;56(3):439-43.

国分麻紀（研究発表）

妊娠期における夫婦の性生活に対する意識と親意識の関連

11月9日

小町美由紀（論文抄読）

Chien WT, Chiu YL, Lam LW, Ip WY. Effects of a needs-based education programme for family carers with a relative in an intensive care unit: a quasi-experimental study. *Int J Nurs Stud*. 2006;43(1):39-50.

陳俊霞（研究発表）

孫の養育への参加が祖父母の Well-being 及び家族機能に及ぼす影響の検討（仮）

11月16日

當山紀子（論文抄読）

Labarere J, Gelbert-Baudino N, Ayral AS, Duc C, Berchotteau M. Efficacy of breastfeeding support provided by trained clinicians during an early, routine, preventive visit: a prospective, randomized, open trial of 226 mother-infant pairs. *Pediatrics*. 2005;115(2):e139-146.

池田真理（研究発表）

妊婦のアタッチメント・スタイルが産後うつ発症に与える影響に関する研究

11月30日

西垣佳織（研究発表）

在宅重症心身障害児を対象としたレスパイトケアに関する研究

松原由季（研究発表）

保育所看護職による感染症対策に関する研究

12 月 7 日

陳俊霞（論文抄読）

Goh ECL. Grandparents as childcare providers: An in-depth analysis of the case of Xiamen, China. Journal of Aging Studies. 2009;23(1):60-68.

末次美子（研究発表）

早産児の母親の出産体験の認知とボンディング形成に関する研究

12 月 14 日

三井千佳（研究発表）

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示

渡邊栄美（研究発表）

家族看護尺度調査票(the Families's importance in Nursing Care-Nurses's Attitudes:FINC-NA)
の日本語版開発

松原由季（研究発表）

保育所看護職による感染症対策に関する研究

1 月 4 日

三井千佳（修士論文発表準備）

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示

渡邊栄美（修士論文発表準備）

家族看護尺度調査票(the Families's importance in Nursing Care-Nurses's Attitudes:FINC-NA)
の日本語版開発

1 月 18 日

三井千佳（修士論文発表準備）

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示

渡邊栄美（修士論文発表準備）

家族看護尺度調査票(the Families's importance in Nursing Care-Nurses's Attitudes:FINC-NA)
の日本語版開発

1 月 25 日

三井千佳（修士論文発表準備）

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示

渡邊栄美（修士論文発表準備）

家族看護尺度調査票(the Families's importance in Nursing Care-Nurses's Attitudes:FINC-NA)
の日本語版開発

2 月 1 日

藤岡寛（研究発表）

在宅重症心身障害児を療育する家族のエンパワメントに関する研究

松原由季（研究発表）

保育所感染症対策における看護職の専門性と認識する課題

2 月 15 日

小林京子（論文抄読）

Knafl KA, Knafl GJ, Gallo AM, Angst D. Parents' perceptions of functioning in families having
a child with a genetic condition. J Genet Couns. 2007;16(4):481-492.

大野真実（研究発表）

慢性精神疾患患者と同居する家族のレジリエンスと精神的健康との関連についての研
究（仮）

2 月 22 日

国分麻紀（論文抄読）

Hasui C, Kishida Y, Kitamura T. Factor structure of the FACES-III in Japanese university
students. Fam Process. 2004;43(1):133-140.

森下美紀（研究発表）

一般病棟と緩和ケア病棟における終末期がん患者介護者の QOL の違いの実態とケアの
満足感と QOL の関連

3月1日

藤岡寛（論文抄読）

Walsh T, Lord B. Client satisfaction and empowerment through social work intervention. Soc Work Health Care.2004;38(4):37-56.

佐藤伊織（研究発表）

日本における小児脳腫瘍経験者の健康関連 QOL への関連要因

3月8日

當山紀子（研究発表）

保健師の母乳育児支援の実態とその関連要因に関する研究

小林京子（研究発表）

小児急性リンパ性白血病児と家族に関する研究

4. 家族看護学教室研究会

4-1. 家族看護学研究会（講師敬称略）

第45回 2009年4月24日

細坂泰子（東京慈恵会医科大学医学部看護学科母性看護学 講師）

「学士力を育てるカリキュラムー母性看護学実践」

第46回 2009年7月17日

小林京子（神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野 助教）

「子どものQOL尺度の開発および小児がん病児と家族に関する研究」

第47回 2009年10月23日

松本和史（東京大学医科学研究所附属病院医療安全管理部 特任研究員）

「看護系大学院におけるトランスレーショナルリサーチに関する教育について」

第48回 2009年11月20日

佐藤郁哉（一橋大学大学院商学研究科 教授）

「フィールドノーツを用いたデータ収集・分析のポイント」

第49回 2010年3月19日

末次美子（九州大学大学院医学研究院保健学部門 助教）

「看護者の感情調整と精神的健康」

第50回 2010年5月28日

中村伸一（中村心理療法研究室 室長）

「クライアント・センタード・システマティック・アプローチ（CCCA）～心的反応を呈した精神遅滞の少女の事例～」

第51回 2010年12月17日

涌水理恵（筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻 助教）

「健康問題のある児を養育する家族のエンパワメントに関する研究」

4-2. 家族ケア症例研究会

第 23 回 2009 年 5 月 22 日

三井千佳（家族看護学分野 修士 1 年）

重症心身障害児の在宅移行

第 24 回 2009 年 6 月 26 日

樋口明子（財団法人がんの子供を守る会/家族看護学分野 客員研究員）

死別後の小児がん患者家族へのケア

～母のグリーフからきょうだいの自立へと広がっていく援助～

第 25 回 2009 年 9 月 25 日

渡邊栄美（家族看護学分野 修士 1 年）

終末期患者と新人看護師

～孤独感を表出されたときの場面を中心に～

第 26 回 2009 年 12 月 18 日

比田井理恵（千葉県救急医療センター看護局 急性・重症患者看護専門看護師）

くも膜下出血により意識障害を来した患者の家族ケア

～家族間のコミュニケーションおよび協力体制の促進を図るには～

第 27 回 2009 年 2 月 19 日

副島堯史（東京大学医学部附属病院 2 階北病棟 看護師）

長期入院を要する幼児の発達支援

第 28 回 2010 年 6 月 18 日

大野真実（家族看護学分野 修士課程 1 年）

育児中の女性がん患者とその家族への看護

第 29 回 2010 年 7 月 16 日

瀬戸山有美（看護師）

親の面会が少ない長期入院児への看護支援

第30回 2010年9月24日

津村明美（静岡県立静岡がんセンター 看護師）

養育期の家族のつながりを支えるケア

～がんである母親のターミナル期を家族でどう過ごすか～

第31回 2010年10月22日

菊池良太（東京大学医学部附属病院）

術後急性期における両親の児への愛着形成を目的とした支援

第32回 2010年11月19日

森下美紀（家族看護学分野 修士課程1年）

母親ががん告知を受けた思春期の娘への関わり

5. 量的研究勉強会（院生自主勉強会）

【目的】

- (1) 看護学・心理学・教育学などの研究領域の量的な研究を通して、統計分析の使い方や結果の解釈の仕方などを学ぶ。
- (2) 統計分析手法に熟達し、学部生や臨床ナースに対し、教授できる力を養う。

【内容】

- (1) 各分析手法の解説（担当者）
- (2) 各分析手法の論文等例示（担当者）

【日程】

第1回 2009年5月20日

- (1) 記述統計や要約統計などの基礎的事項の解説（佐藤伊織）

第2回 2009年5月27日

- (1) 対応のない t 検定（佐藤伊織）
- (2) 論文等例示（栗原佳代子・池田真理・大塚寛子・三井千佳）

第3回 2009年6月3日

- (1) 対応のある t 検定（西垣佳織）
- (2) 論文等例示（山本弘江・佐藤伊織・陳俊霞・岡部花枝）

第4回 2009年6月10日

- (1) 相関・推定（池田真理）
- (2) 論文等例示（杉下佳文・西垣佳織・小町美由紀・渡邊栄美）

第5回 2009年6月17日

- (1) 回帰分析（小町美由紀）
- (2) 論文等例示（栗原佳代子・池田真理・小町美由紀・国分麻紀）

第6回 2009年6月24日

- (1) 重回帰分析（陳俊霞）
- (2) 論文等例示（山本弘江・佐藤伊織・三井千佳）

第7回 2009年7月1日

- (1) 実際の修士論文の紹介とクリティーク（大塚寛子）
- (2) 質疑応答と論文解説（小町美由紀）

第8回 2009年7月8日

- (1) 実際の修士論文の紹介とクリティーク（岡部花枝）
- (2) 質疑応答と論文解説（陳俊霞）

第9回 2009年7月29日

- (1) 因子分析（陳俊霞）
- (2) 論文等例示（杉下佳文・池田真理・小町美由紀）

第10回 2009年8月5日

- (1) 分散分析（大塚寛子）
- (2) 論文等例示（栗原佳代子・西垣佳織・大塚寛子・渡邊栄美）

第11回 2009年8月26日

- (1) ノンパラメトリックな手法（渡邊栄美）
- (2) 論文等例示（山本弘江・佐藤伊織・陳俊霞・三井千佳）

第12回 2009年9月2日

- (1) ロジスティック回帰（三井千佳）
- (2) 論文等例示（杉下佳文・西垣佳織・小町美由紀）

第13回 2009年9月9日

- (1) 度数と割合の検定（岡部花枝）
- (2) 論文等例示（栗原佳代子・池田真理・大塚寛子・国分麻紀）

第14回 2009年9月16日

- (1) 実際の修士論文の紹介とクリティーク（渡邊栄美）
- (2) 質疑応答と論文解説（佐藤伊織）

6. 教育活動（担当講義・実習）

平成 21 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
生きることを支える科学:看護学の最先端	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	前期	木	16：20～17：50
健康科学・看護学概論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	水	10：40～12：10
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ - 3	月 木	16：20～17：50 9：00～12：10
小児看護学	看護学コース必修	分 1	3	後期Ⅰ - 2	月 金	9：00～12：10 16：20～17：50
家族看護学	看護学コース必修 選択	2	3	後期Ⅱ	金	13：00～16：10
小児看護学実習	看護学コース必修	分 1	3	後期	月～金	9：00～16：00
助産学Ⅲ	選択	2	4	前期Ⅰ - 2 Ⅲ	水 木・金 火～金	13：00～16：10 9：00～12：10 9：00～16：10
小児看護学	看護学コース必修	分 1	4	前期Ⅲ	月 火 水 木	14：40～16：10 10：40～16：10 10：40～12：10 9：00～16：10
小児看護学実習	看護学コース必修	分 2	4	後期	月～金	8：00～15：00

※ 開講時期

前期Ⅰ	4月9日	～	6月1日	8週
前期Ⅱ	6月4日	～	7月20日	7週
前期Ⅲ	9月3日	～	10月19日	7週
後期Ⅰ	10月22日	～	12月7日	7週

後期Ⅱ	12月10日	～	2月8日	7週
後期Ⅲ	2月11日	～	3月7日	4週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ 5月～7月

家族看護学特論Ⅱ 10月～2月

トランスレーショナルリサーチ看護学入門

7月13日～7月24日（医学集中実習）

看護コンサルテーション特論 9月11日～12月1日

平成 22 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
生きることを支える科学:看護学の最先端	総合科目-D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	前期	木	16:20～17:50
健康総合科学論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	火	10:40～12:10
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	月 木	16:20～17:50 9:00～12:10
小児看護学	看護学コース必修	分1	3	後期Ⅰ-2	月・金	9:00～12:10 16:20～17:50
家族看護学	看護学コース必修 選択	2	3	後期Ⅱ	金	13:00～16:10
小児看護学実習	看護学コース必修	分1	3	後期	月～金	9:00～16:00
助産学Ⅲ	選択	2	4	前期Ⅰ-2	水 木・金	13:00～16:10 9:00～12:10
				Ⅲ	火～金	9:00～16:10
小児看護学	看護学コース必修	分1	4	前期Ⅲ	月 火 木	14:40～16:10 10:40～17:50 9:00～16:10
小児看護学実習	看護学コース必修	分2	4	後期	月～金	8:00～15:50

※ 開講時期

前期Ⅰ	4月7日	～	5月30日	8週
前期Ⅱ	6月2日	～	7月18日	7週
前期Ⅲ	9月1日	～	10月17日	7週
後期Ⅰ	10月20日	～	12月5日	7週
後期Ⅱ	12月8日	～	2月6日	7週
後期Ⅲ	2月9日	～	3月6日	4週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ 5月～7月

家族看護学特論Ⅱ 10月～12月

トランスレーショナルリサーチ看護学入門

7月12日～7月23日（医学集中実習）

看護コンサルテーション特論 9月17日～12月7日

7. 教室の沿革

1992.4.1	東京大学医学部保健学科は、学科名称を健康科学・看護学科に改称し東京大学医学部健康科学・看護学科家族看護学講座が新設される。
1992.10.1	杉下知子氏が本講座の教授として発令される。
2002.4.1	上別府圭子氏が本教室の助教授として発令される。
2003.3.31	杉下知子教授が退官。
2003.4.1	上別府圭子助教授が教室主任を務める。
2009.4.1	修士課程に2名（三井千佳，渡邊栄美）が入学，博士課程に1名（當山紀子）が入学，1名（佐藤伊織）が進学，3名（小林京子，小町美由紀，陳俊霞）が復学．博士課程1名（古田正代）が休学．
2009.5.29	平成21年度家族看護学分野スタッフ会議を開催。
2009.12.1	村山志保助教が復職。
2010.2.28	山本弘江助教が退任。
2010.3.25	学部卒論生3名（国分麻紀，大川真穂，坂本裕）が卒業，修士課程3名（大塚寛子，東樹京子，野中らいら）が修了。
2010.4.1	修士課程に3名（大野真実，国分麻紀，森下美紀）が入学，博士課程に2名（末次美子，藤岡寛）が入学，1名（大塚寛子）が進学。
2010.6.28	平成22年度家族看護学分野スタッフ会議を開催。
2010.10.1	博士課程1名（大塚寛子）が休学。
2011.1.1	博士課程1名（古田正代）が復学。
2011.3.25	学部卒論生1名（松原由季）が卒業，修士課程2名（三井千佳，渡邊栄美），博士課程1名（池田真理）が修了。
2011.3.31	山崎あけみ講師，杉下佳文助教が退任。

資料（卒業論文・修士論文・博士論文要旨）

平成 21 年度

卒業論文

国分麻紀：

妊娠期における夫婦の親意識の関連要因 ―関係性に注目して―

修士論文

大塚寛子：

高校生の月経前愁訴に関する研究

東樹京子：

小児がん患者の復学支援 ―感染症に対する看護師からの情報提供―

野中らいら：

小児がん患者の復学に関する学校長の意識

平成 22 年度

卒業論文

松原由季：

保育所感染症対策における看護職の専門性と認識する課題

修士論文

三井千佳：

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示

渡邊栄美：

家族看護態度調査票（The Families' Importance in Nursing Care- Nurses' Attitudes: FINC-NA）の日本語版開発

博士論文

池田真理：

妊婦のアタッチメント・スタイルが産後うつ病発症に及ぼす影響に関する研究

卒業論文内容要旨

論文題目：妊娠期における夫婦の親意識の関連要因—関係性に注目して—

指導教員：上別府圭子 准教授

東京大学医学部健康科学・看護学科

平成 20 年度進学

国分麻紀

【緒言】

妊娠期という親への移行期には、夫婦は心理的にも家族の再構成が迫られ、親になることを受容、自覚するだけではなく、パートナーへのイメージも変化すると考えられる。また、それに伴い夫婦の関係性が変化していくと考えられる。また、逆に、互いの関係性が変化することが親役割の受容、すなわち親意識に影響することも先行研究では報告されている。親への移行や性生活の変容など互いの関係性に変化が激しい妊娠期において、妊娠期の親意識の関連要因を明らかにすることは、親意識の発達を見る上で非常に重要と考えられる。そこで、本研究は妊娠期の夫婦の親意識と、自覚・イメージ・関係性(性生活を含む)との関連を明らかにすることを目的に調査を行った。

【方法】

2009 年 11 月から 12 月、産科クリニック A の出産教室を受講した夫婦 183 組に依頼文書と無記名自記式質問紙を配布し、郵送にて回収した。質問紙の内容は、夫婦共に、属性、親意識（母性意識尺度を使用）、自覚・イメージ、性生活を含む夫婦の関係性（夫婦間の愛情尺度、FAMILY APGAR TEST 及び自作の質問項目を使用）を問うものである。分析には、SPSS12.0 J for Windows を使用した。本研究では母性意識尺度の積極的・肯定的意識(MP 得点)を親意識として、従属変数とした。

【結果】

妻 47 名(回収率 25.7%)、夫 41 名(回収率 22.4%)から返送があり、夫婦のペア 41 組(有効回収率 22.4%)を解析対象とした。うち初産婦 32 名、経産婦 9 名であった。妻の MP 得点の平均値は 2.74 ± 0.65 点、夫の MP 得点の平均値は 3.01 ± 0.70 点であった。親意識、親役割自覚ともに、夫婦間で有意な差は見られなかった。また、妻の役割配分や相手に抱く愛情、妊娠前の性生活において夫婦間に認識のずれが見られた。

妊娠期の夫婦の親意識の関連要因を検討するため、親意識との有意な関連項目を変数として選択した。属性について、妻は有意に差が見られた「有職」「無職・休職」という就業状況を変数として投入した。自覚・イメージと関係性については、「親役割自覚」、「パートナーへの親役割イメージ」、「パートナーからの親役割イメージ」、「親密性」、「性的関心・欲求の一致度」の5項目を変数として選択した。変数減少法により重回帰分析を行い、表 1,2 の結果が得られた。妻の親意識は、「親役割自覚」、「親密性」、「性的関心・欲求の一致度」という3因子が選択され、調整済み決定係数が0.47であり、夫の親意識は「親役割自覚」、「妻からの親役割イメージ」、「性的関心・欲求の一致度」という3因子が選択され、調整済み決定係数が0.37であった。

表 1 妻の親意識の関連要因

説明変数	標準化偏回帰係数 (β)	p 値
親役割自覚	0.41	0.002**
親密性	0.37	0.007**
性的関心・欲求一致度	0.22	0.12
調整済みR ²	0.47	

表 2 夫の親意識の関連要因

説明変数	標準化偏回帰係数 (β)	p 値
親役割自覚	0.48	0.003**
妻からの親役割イメージ	0.23	0.14
性的関心・欲求の一致	0.21	0.12
調整済みR ²	0.37	

*p<0.05 **p<0.01

【考察】

夫婦ともに、親だという自覚が強いほど、親意識が高く、妻においては夫への愛情が深いほど親意識が高いことが明らかになった。また、夫婦共に「性的関心・欲求一致度」が親意識に影響する可能性が示唆された。しかし、現実には約 4 割の夫婦が夫婦のどちらか一方もしくは両方が、性的関心や欲求が合っていないと感じていた。このことから、妊娠期の夫婦の親意識を考える上で、従来言われていた家事や育児だけではなく、性生活も考慮に入れて検討することが望まれる。

【結論】

妊娠期の妻の親意識の関連要因は、親役割自覚、親密性であり、夫の親意識の関連要因は親役割自覚であった。このことから、夫婦ともに、親だという自覚が強いほど親意識が高く、妻においては夫への愛情が深いほど妻の親意識が高いことが明らかになった。また、有意ではなかったものの、夫婦共に「性的関心・欲求一致度」の影響が示唆された。

また、本研究において、親意識に夫婦間の差は見られず、親役割自覚も夫婦とも 3 割ほどだと自覚しており、有意な差は見られなかった。一方、妻の役割配分や、相手に抱く愛情、性生活において夫婦間に認識のずれがあることが明らかになった。

高校生の月経前愁訴に関する研究
Premenstrual distress among high school students

86003 大塚 寛子
Hiroko Ootsuka

指導教員： 上別府 圭子 准教授
Tutor: A. Prof. Kiyoko Kamibepu

健康科学・看護学専攻 平成 20 年 4 月入学
Admission to School of Health Science
and Nursing in April, 2008

高校生を対象とした月経前愁訴への支援および教育的関わりへの示唆を得るため、「月経前の心身のイメージ」に焦点をあて、高校生の月経前愁訴に関連する要因を明らかにすることを目的に、無記名自記式質問紙調査を行った。調査期間は 2009 年 10 月であった。対象者は、高校 1～3 年生の女子 217 名で、回収率は 78.2%、有効回答率は 57.0%であった。対象者の平均年齢は 16.5 歳、平均初経年齢は 12.3 歳で、日本女性の平均初経年齢と一致していた。対象者の 84.3%は程度の差はあるものの何らかの月経前愁訴を有していた。そのうち、月経前の心身の症状により、学校や部活動等での日常行う活動が妨げられていた者は 51.2%であった。また、月経前症候群(premenstrual syndrome:PMS)を知っていた者は 16.1%であった。PMS の認知度は低いものの、月経前に半数以上が日常の活動を妨げられており、実際に日常生活や学校生活に支障をきたしていた。

月経前愁訴(月経前 total MDQ score)を従属変数とした重回帰分析で月経前愁訴を最もよく説明していたのは、「月経前の心身のイメージ」(標準化 $\beta=-0.353$, $p=0.000$)と「月経中の症状による活動制限」(標準化 $\beta=0.286$, $p=0.000$)であった。

高校生を対象とした月経前愁訴への支援および教育的関わりの一つとして、「月経前の心身のイメージ」がポジティブになるように働きかけることが重要であることが示された。また、月経中の症状により普段の活動がどのくらい妨げられているかが、月経前愁訴を予測する手がかりとして有用であることが示唆された。

Key words: adolescent, health education, high school students, premenstrual syndrome,
school health

小児がん患者の復学支援
—感染症に対する看護師からの情報提供—
Support for school reentry of children with cancer:
Provision of information from nurses about infectious disease

76063 東 樹 京 子

Kyoko Toju

指 導 教 員: 上別府 圭子 准教授

Tutor: A.Prof. K. Kamibepu

健康科学・看護学専攻平成 19 年 4 月入学

Admission to Division of Health Sciences and Nursing in April, 2007

小児がん患者の復学支援に関し、入院から復学後の過程で、感染症に対する看護師が行う情報提供内容を明らかにすることを目的とした。方法は、都市部にある 2 施設合計 17 名の看護師、医師、院内学級の教員、医療ソーシャルワーカー、保護者を対象に、半構造化面接を実施し、質的分析を行った。結果として、小児がんの入院から復学後の過程は、入院時、一時退院時、退院時、復学後の 4 つの時期に分類され、これらの各時期での、患者、保護者、前籍校の教員を対象者とした情報提供内容が明確になった。抽出されたカテゴリのうち、看護師がすでに行っている情報提供内容には、【感染媒介予防を行うこと】【感染症に関する認識を広げること】【患者が感染予防行動を習得すること】【受診を要する場合の対応を把握すること】【連携をすること】があげられた。現在は行っていないが看護師からの必要な情報提供内容には、【患者が他者に理解してもらう努力を行うこと】【感染媒介予防を行うこと】【感染症に関する認識を広げること】【受診を要する場合の対応を把握すること】【連携をすること】があげられた。以上より、小児がん患者の復学支援に関し、感染症に対する看護師からの情報提供は、時期や対象者別に行っていること、すでに行っている内容と、現在は行っていないが必要な内容が明らかになった。看護師は、小児がん患者の復学支援において、前籍校での生活を見据えた視点を持ち、多職種と連携をし、知識の活用や経験の共有を行っていくことが必要であると示唆された。

Key words: cancer, children, infectious disease, information, school reentry

小児がん患者の復学に関する学校長の意識

Awareness of school reentry of children with cancer among principals

056022 野中 らいら

Raira Nonaka

指導教員: 上別府 圭子 准教授

Tutor: A. Prof. K. Kamibepu

健康科学・看護学専攻平成 17 年 4 月入学

Admission to Division of Health Sciences and Nursing in April, 2005

【目的】小児がん患者の復学の際に行おうとする学校長の配慮に関連する要因、および学校長にとって必要であり、医療関係者が提供可能な資源への示唆を得ることである。

【方法】全国の公立小中学校計 31565 校から層別無作為抽出によって選定した、学校長 2000 人を対象に自記式質問紙調査を実施した。

【結果】464 人(23.4%)から有効な回答を得た。学校長の平均年齢は 57.1 歳、平均教員経験年数は 32.6 年、平均学校長経験年数は 4.4 年であった。小児がん患者の復学に関わった経験のある学校長は 43 人(9.3%)、小児がんに関する研修会に参加したことがある者は 15 人(3.2%)だった。

小児がん患者が在籍している際に行おうとする学校長の配慮に関連する要因は、小児がんや患者について知る必要があると意識し、特別支援教育を推進する学校の雰囲気が高く評価していることであった。

患者の復学にあたって学校にあると考えられる困難は、小児がん患者に対応した経験のある教員が少ないこと、学校現場の教員が多忙であること、医療情報に関する教員の研修の機会が少ないことなどがあげられた。円滑な復学のために必要な資源として、特別支援教育に関する人員・予算、医療関係者による小児がんについての出張研修会があげられた。

【結論】学校長の、小児がん患者の復学に関する配慮には、学校のもつ、特別支援教育を推進する雰囲気への高い評価と、小児がんに関する知識への高い関心に関連していた。医療関係者は、安全な学校生活を支えるための知識や疾患や入院生活に関する知識について研修会を開くことや教員の相談にのることなどの資源を提供できると考えられた。

Key words: children with cancer, principal, school reentry, special support education

卒業論文内容要旨

論文題目：保育所感染症対策における看護職の専門性と認識する課題

指導教員：上別府 圭子 准教授

東京大学医学部健康総合科学科

平成 21 年度進学

氏名 松原 由季

緒言

保育所は就学前の子どもが集団生活をする場であり、感染症が流行しやすい環境である。適切な感染症対策は子どもを守るために必要である。平成 21 年には厚生労働省が「保育所における感染症対策ガイドライン」を発表し、感染症対策に対する意識は保育現場で高まりつつある。

前述のガイドラインの中では、看護職がその専門性を生かして感染症対策を実施する必要性が明記されている他、看護職、保育士を含む全職員が連携、協力することの重要性も述べられている。しかしながら、各職種の担う役割や連携の方法は明確化されていない。

先行研究では、看護職配置園で既往歴・予防接種の把握や相談が未配置園に比べ有意に高い割合で行われていることが明らかであり、看護職が保育所での感染症対策において重要な役割を担っていると思われる。一方、園内で感染症が広まったときに看護職が不安を感じるという報告や、自らの専門性が不透明であるという声や専門性を高めるための支援を求める声があった。

そのような現状がある中、感染症対策における保育所看護職の専門性、他職種との連携の実際と、看護職の認識する課題などは明らかになっていない。よって、本研究では、感染症対策における保育所看護職の専門性を明らかにし、また、困難に感じている点、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

方法

量的調査：社会福祉法人日本保育協会「保育所の環境整備に関する調査研究報告書—保育所の人的環境としての看護師等の配置—平成 21 年度」内の、平成 21 年 10 月 6 日～10 日に実施された全国認可保育所長対象の調査における予防接種の勧奨に関する項目への 966 名の回答（有効回答率 42.2%）及び感染症発生時の対応に関する項目への 1,032 名の回答（有効回答率 45.1%）を二次解析した。看護職配置園と未配置園でクロス集計し、比率の差の検定（Fisher の直接確率検定）を行った。

質的調査：平成 22 年 8 月～23 年 1 月に、東京都内及び近郊の保育所に勤務する 9 名の看護職に対して半構造化面接を行い、質的に分析した。

結果

量的調査：予防接種の勧奨については、配置園では 125 園（39.2%）、未配置園では 145 園（19.3%）が定期接種の予防接種のみではなく任意接種の予防接種についても個別に勧奨していた。未配置園では、328 園（43.7%）が個別に勧奨ではなく、保健便り等で全体に通知していた（表 1）。感染症発生時の対応については、未配置園でも 521 園（69.5%）が、感染症の児が 1 名発生した時点ですぐに緊急の情報提供を行っていた。未配置園のうち 3 園（0.4%）、感染症の児が発生して

も特に保護者に知らせないとした園があった（表 1）。両項目において配置園と未配置園で有意な差が認められた（ $p<0.01$ ）。

質的調査：保育所感染症対策における看護職の専門性について 8 のカテゴリー、認識する課題について 10 のカテゴリーが抽出された。（表 2）

考察

配置園は感染症対策に対する意識が高く、積極的な保護者への働きかけができていた。看護職が専門性を活かし、園で連携や協力体制を築き、巧みに情報を扱い、自身の知識や視点を活用して園内外の感染症対策に取り組んでいることが考えられた。経験や知識を活かして地域の保育所感染症対策の向上に寄与していることは新たな知見だと考えられる。園内外における課題も明らかになり、どの地域でも感染症に関する研修の機会がある必要性、園内の連携のみならず園外においても組織的に連携をつくって対策に取り組む必要性、園の設備改善の必要性、保護者が看病のために休める社会体制づくりの必要性が示唆された。また、感染に対しハイリスクな児への個別的な対応のために、今後未配置園においても看護職の配置が進み、適切な感染症対策への取り組みが可能になることが期待される。

表1 感染症への対応

	合計(n=1,069)		配置園(n=319)		未配置園(n=750)	
	n	%	n	%	n	%
<予防接種の勧奨>						
任意接種も個別に勧奨	270	25.3	125	39.2	145	19.3
定期接種のみ個別に勧奨	151	14.1	46	14.4	105	14.0
全体に通知のみ	444	41.5	116	36.4	328	43.7
接種歴を聴取していないため未接種かどうか不明	101	9.4	10	3.1	91	12.1
無回答	103	9.6	22	6.9	81	10.8
<感染症発生時の対応>						
1人発生したらすぐ対応(情報提供)	787	73.6	266	83.4	521	69.5
複数になったら情報提供	186	17.4	36	11.3	150	20.0
種類によって知らせたり知らせなかったり	56	5.2	8	2.5	48	6.4
知らせない	3	0.3	0	0.0	3	0.4
無回答	37	3.5	9	2.8	28	3.7

Fisherの直接確率検定による *: $p<0.01$

表2 保育所感染症対策における看護職の専門性と認識する課題

カテゴリー	
保育所感染症対策における看護職の専門性	職員や保護者や囑託医との連携や協力体制を築く
	感染症・ケアに関する最新の知識を積極的に得る
	状況に迅速に対応した卓越した情報収集と処理をする
	根拠に基づき児を観察してアセスメントする
	感染に対しハイリスクな児への個別的な対応をする
	感染症・ケアに関する知識を保護者や職員や児が使えるように伝える
	衛生的な視点から園の環境に合わせた対策方法を考える
	経験や知識を活かして地域の保育所感染症対策の向上に寄与する
保育所感染症対策における看護職の認識する課題	感染症対策について保育士と共通認識をもつことに時間がかかる
	多くの人が児に関わるため、感染症対策の徹底ができていない
	園の方針の中での感染症対策の難しさを感じる
	感染症対策を考慮した設備でない
	医師の対応が統一していない
	保護者が仕事を休めない
	保護者自身に児の体調を意識してもらえない
	学校も含めた地域の流行情報の共有が必要である
自治体内の全園における感染症対策の統一が必要である	
異職種で意見交換をする組織が必要である	

青年期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示
Quality of life and disclosure about illness among adolescents with cancer

41096016 三井 千佳

Chika Mitsui

指導教員：上別府 圭子 准教授

Tutor: A. Prof. K. Kamibeppu

健康科学・看護学専攻平成 21 年 4 月入学

Admission to Division of Health Sciences and Nursing in April, 2009

12～18 歳で診断を受け、現在 16～22 歳の青年期がん経験者を対象として、病気に関する自己開示の特徴および経験の記述、QOL との関連を検討することを目的に、自記式質問紙調査および面接調査を行った。調査期間は 2010 年 4 月～12 月であった。質問紙を 38 名に配布し、30 名（有効回答率 79%）から有効回答を得た。面接調査は 16 名に実施した。面接調査の質的分析の結果、病気に関する自己開示の相手やタイミング、開示内容や量を選択する条件として〈自身に起きている事態を把握している〉

〈病気が生活に影響する〉〈自分一人で乗り越えるのは難しい〉〈友人はありのままの自分を受け入れてくれる〉〈親との関係が安定している〉の 5 つのカテゴリが生成された。質問紙調査の結果、対象者が病気について最も開示する相手は、診断当時は母親（50%）、現在は友人と母親（各 33%）が多かった。各対象者の最も開示する相手への開示の希望度と実際の開示度の得点は、開示内容ごとにほぼ一致していた。病気に関する自己開示の満足度を尋ねたところ、対象者は概ね満足していた。重回帰分析の結果、病気に関する自己開示の満足度の高さが精神的健康を高める可能性が示された。青年期がん経験者の精神的健康の向上のため、病気に関する自己開示の満足度を高めるための支援の必要性が示唆された。

Key Words: adolescent, cancer, quality of life, self disclosure

家族看護態度調査票(the Families' Importance in Nursing Care
- Nurses' Attitudes: FINC-NA)の日本語版開発

Development of the Japanese Version of Families' Importance
in Nursing Care - Nurses' Attitudes

41096018 渡邊 栄美

Emi Watanabe

指導教員: 上別府 圭子 准教授

Tutor: A. Prof. Kiyoko Kamibeppu

健康科学・看護学専攻平成 21 年 4 月入学

Admission to Division of Health Science and Nursing in April, 2009

本研究は、家族看護態度調査票 the Families' Importance in Nursing Care - Nurses' Attitudes (FINC-NA) 日本語版の開発と、妥当性および信頼性の検討を目的とした。FINC-NA は、看護師の家族に対する態度を領域横断的に測定する調査票である。26 項目、4 つの下位尺度「看護ケアの資源としての家族」(Fam-RNC: family as a resource in nursing care)、「対話すべき相手としての家族」(Fam-CP: family as a conversational partner)、「負担としての家族」(Fam-B: family as a burden)、「家族自身の資源としての家族」(Fam-OR: family as own resource)から構成される。まず、原作者から了承を得た後、順翻訳・逆翻訳・パイロット調査の手順を経て FINC-NA 日本語版を作成した。その後、妥当性・信頼性検討のための調査を病院勤務の看護師 1101 名に依頼し、886 名 (80.5%) から有効回答を得た。また再調査を 117 名に依頼し 88 名 (75.2%) から有効回答を得た。探索的因子分析により、原版と対応のある因子構造が確認された。併存妥当性の検討では、「看護ケアにおける家族の重要性の認識」、「家族看護能力の自己評価」、「患者とかかわる場面で家族のとらえ方」と対応がみられた。既知集団妥当性の検討では、家族看護について現任教育を受けた者が、受けていない者に比べ、有意に FINC-NA 日本語版の得点が高かった。さらに、総合点において十分な内的整合性(クロンバックの α 係数=0.88)と再検査信頼性(級内相関係数=0.72)が検証された。以上から、妥当性および信頼性が確認され、FINC-NA 日本語版は使用可能であることが示された。

Key words: family nursing, FINC-NA, hospital nurses, scale development

指導教員 上別府圭子准教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 18 年 4 月入学

保健学博士課程

健康科学・看護学専攻

氏名 池 田 真 理

I 緒言

産後うつ病は出産後の母親の 10-20%が罹患するといわれている。産後うつ病に罹患した母親は、子どもの成長発達に悪影響を及ぼし、さらに子どもへの虐待との関連も報告されている。これまでの研究で、産後うつ病は出産後の女性ホルモンの急激な低下のみならず、妊娠期の抑うつや不安、精神疾患の既往、結婚満足度などの心理社会的要因も強く影響していることが報告されている。本研究では、それらの要因に加えて、これまであまり検討されてこなかった妊婦の対人関係の持ち方であるアタッチメント・スタイルに着目して、産後うつ病との関連について検討することを目的とした。アタッチメント・スタイルと産後うつ病については、海外の先行研究で、妊婦のアタッチメント・スタイルが不安定であると、産後うつ病のリスクが高くなるという報告があるが、本邦では未だ産後うつ病とアタッチメント・スタイルとの関係は明らかになっていない。産後うつ病を予防する視点からも、これまでに明らかになっている産後うつ病のリスク要因にアタッチメント・スタイルを加えてそれぞれの要因の影響を評価することが必要であると考えた。産後うつ病の予防的視点からも、関連する要因を妊娠期から把握し、適用可能性のある心理社会的支援の示唆が得られると考えた。

II 方法

1. 対象者と調査方法

対象は都内大学医学部附属病院 1 施設の母親学級出席者、または産科外来通院中の妊婦で、20 歳以上、調査時点で結婚していて、重大な身体疾患や妊娠合併症の無い者とした。調査は妊娠後期と出産後 1 ヶ月の 2 時点で行った。

妊娠 32 週以降 (T_1) に自記式質問紙の回答を依頼した。質問項目は、人口統計学的情報（年齢、学歴、職業、同居者、暮らし向き）と精神科既往の有無、妊娠体験のうけとめ（悩ませるもの、気持ちが高まるもの）、産後うつ病の情報の有無、妊娠後期の抑うつ、及び既存尺度（産後うつ病予測尺度：PDPI-R、家族関係尺度：FRI、エジンバラ産後うつ病自己調査票：EPDS）であった。次にア

タッチメント・スタイル面接（以下、ASI）を実施し、第1相において、アタッチメント対象（夫と他2名）との関係の安定性を測定し、標準型、非標準型に評定した。次に第2相において、他者との関係性を妨げるものである7つの尺度により測定し、「とらわれ型」、「恐れ型」、「怒り－拒否型」、「引っ込み型」「明らかな安定型」に評定した。出生時在胎日数、出生時体重、分娩様式、分娩所要時間、出血量などの産科的情報は診療録から情報収集した。出産後1ヶ月健診時（ T_2 ）に M.I.N.I. 精神疾患簡易構造化面接を行った。その後、自記式質問紙で、EPDS、マタニティブルーについて尋ね、続いて、出産の振り返り、退院後の育児の様子、他者との関係性について面接（産後面接）を実施した。91名から同意を得て、84名にASIを実施した。選定基準を満たさなかった6名、産後面接を辞退した1名、産後に入院した1名を除いた76名を分析対象とした。

2. 分析方法

T_2 のM.I.N.I.精神疾患簡易構造化面接で陽性だった者を「産後うつ病」とし、それを従属変数として、 T_1 で測定した要因についての単変量解析を行った。次に、産後うつ病を従属変数として、単変量解析で有意差のあった要因とモデルの理論上必要な要因を独立変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。ASIと産後面接については、面接の逐語録の質的内容分析を行った。

III 結果

1. 対象者の特徴

対象者の平均年齢は33.4歳、最終学歴は大学・大学院卒が54名(71.1%)で、職業を持つ者が41名(53.9%)と半数を上回った。暮らし向きは14名(18.4%)が「ゆとりがある」、62名(81.6%)が「普通」と答えた。13名(17.1%)が精神科の受診経験があり、19名(25%)が流産の経験があり、9名(11.8%)が不妊治療の経験があった。また、婦人科疾患の既往がある者は10名(13.2%)であった。

妊娠体験のうけとめについての得点は、「悩ませるもの」が 7.7 ± 2.4 、「気持ちが高まるもの」は 10.9 ± 1.2 であった。産後うつ病についての知識は、知っている者が64名(84.2%)、また、知っていた方が良いと思う者が70名(92.1%)であった。

2. 対象者のアタッチメント・スタイルの特徴

ASIの結果は、標準型が45名(59.2%)、非標準型は31名(40.8%)だった。第2相では「とらわれ型」が2名(2.6%)、「恐れ型」が17名(22.4%)、「怒り－拒否型」が7名(9.2%)、「引っ込み型」が17名(22.4%)、「明らかな安定型」が33名(43.4%)と評定された。

3. 産後うつ病に影響を与える要因

産後うつ病と判定されたのは、16名(21.1%)であった。単変量解析で産後うつ病と有意な関連があった変数は、婦人科疾患の既往、妊娠体験のうけとめの「悩ませるもの」、「気持ちが高まるも

の1、妊娠後期の抑うつ、アタッチメント・スタイル（標準型、非標準型の2値）であった。子宮内膜症、子宮筋腫などの婦人科疾患の既往は、産後うつ病群が有意に多かった。妊娠体験のうけとめの「悩ませるもの」は非産後うつ病群が有意に低く、「気持ちが高まるもの」は非産後うつ病群が有意に高かった。妊娠後期の抑うつ（EPDS）は産後うつ病群が有意に高かった。

アタッチメント・スタイルで非標準型と評定された者は、産後うつ病群で10名（62.5%）、非産後うつ病群で21名（35.0%）であり、産後うつ病群で、非標準型の占める割合は有意に多かった。対象者の産科的要因及び児の属性に関しては、産後うつ病群と非産後うつ病群で有意な差がある要因はなかった。

産後うつ病を従属変数として、リスク要因を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、有意に関連していたのは、暮らし向き（OR 0.04, 95%CI: 0.002-0.729, $p=0.030$ ）、妊娠後期の抑うつ（OR 15.83, 95%CI: 1.001-250.274, $p=0.050$ ）、アタッチメント・スタイル（OR 7.57, 95%CI: 1.171-48.913, $p=0.034$ ）の3変数であった。この回帰モデルと、アタッチメント・スタイルを除いたモデルのROC分析を行った結果、AUCは0.872（ $p<0.01$, 95%CI: 0.766-0.978）と0.844（ $p<0.01$, 95%CI: 0.741-0.946）となり、アタッチメント・スタイルを含めることで産後うつ病の予測性が高まることが分かった。

3. アタッチメント・スタイルと産後うつ病との関連

産後うつ病群の16名のASIの内容を質的分析した結果、夫とのアタッチメント関係が不安定、夫が単身赴任等で同居していない、夫に妊娠・出産に関連した悩みの打ち明けをしていない、また夫の共感的な応答が少ないことがあげられた。また、自己信頼が高い特徴があった。産後面接で語られた内容で共通していたのは、出産後の育児を予想以上に負担に感じ、期待したサポートが得られなかったり、出産時に子どもが黄疸や不整脈などにより医療的介入を受けていたことであった。

本研究では、引っ込み型の構成比が高かったため、引っ込み型で産後うつ病になった者とならなかった者を比較した。その結果、産後うつ病になった者は、夫の共感が期待できないと思い相談をせず、また、話をしても夫から情緒的な応答は得られていなかった。また、出産後の子育てが自分の思うようにならなかったり、授乳指導の場などで高い自己信頼を傷つけられるなど、自信を喪失して精神的に不安定になっていた。一方、産後うつ病になっていなかった者は出産を機に、夫や重要他者に打ち明けができていた。

IV 考察

産後うつ病の発症を予測する要因として、ロジスティック回帰分析から、暮らし向き、妊娠後期の抑うつ、アタッチメント・スタイルが示された。産後うつ病のリスク要因としてアタッチメント・スタイルを含めることが、産後うつ病の予測性を高めることが明らかになり、妊婦のアタッチメント・スタイルに着目することの重要性が確認できた。

産後うつ病群のASIと産後面接の内容の質的分析から、妊娠期に出産やその後の育児についての不安を夫と共有することの重要性が示唆された。また、夫との関係性が良好であっても、出産後に夫が不在ということが大きく影響して、精神的に不安定になることが推察された。アタッチメント・

スタイルを構成する態度では、自己信頼が高く、自立していて自己統制感を重要視する人が多く、産後に自分で統制できない状況が出てきたときに非常に戸惑っていることを示唆していた。産後面接では、育児が予想以上に大変であること、期待したサポートが得られないこと、自身の体の回復が予想以上に遅いこと、母乳育児などが思い通りに行かず自信喪失するなどといったことが産後うつ病のリスクを高めていると考えられた。また、アタッチメント・スタイルに関わらず、子どもが出産時に医療的介入を受けた場合に、産後うつ病のリスクが高くなっており、自責の念にかられたり、心配が募ったりと、その後も抑うつ症状が続くことが伺えた。出産後に来院する母乳外来や産褥健診などの機会に医療側からの適切なサポートと、家族からの支援が必要と考える。

これまでの海外の研究では、引っ込み型は産後うつ病との関連が無かったと報告されているが、本研究の引っ込み型で産後うつ病になった者は、夫への打ち明けレベルが低く、人に相談をしないという共通点が浮かび上がった。出産までは、人に頼ることなく物事を上手く処理できていても、出産後は情緒的・実質的なサポートが必要となり、適切に希求できずにいると産後うつ病になる可能性があることが示唆された。引っ込み型も他の非標準型と同様に産後うつ病のリスクは高い可能性があるため、このタイプに対しては共感的な関係形成を働きかけ、他者にサポートを希求できるような支援を行うことが必要と考えられる。一方、引っ込み型で産後うつ病にならなかった者は、出産前から夫と妊娠・出産に関する気持ちの打ち明けができていたり、出産を機に夫に気持ちを含めた打ち明けが出来るようになっていることが伺え、これまでのアタッチメント・スタイルを肯定的な方向へ変化させた可能性が示唆された。

本研究の対象者は都市部の大学付属病院に受診する者で、アタッチメント・スタイルは先行研究と比較して非標準型の構成が高いという特徴をもつ集団であった。また、サンプルサイズの関係で、一部の信頼区間が広がった。今後はサンプル数を確保し、地域差も鑑みた複数の施設で研究を行う必要がある。以上の限界はあるが、これまであまり重視されてこなかったアタッチメント・スタイルと産後うつ病との関連について検討したことは意義があると考ええる。今後の展望としては、妊娠期からアタッチメント・スタイルを含めたリスク要因を把握して、リスクの高い妊婦に対しては出産とその後に向けて、アタッチメント・スタイルに添った心理社会的支援について検討していくことが必要である。

家族看護学教室 教室員（平成 21 年度～平成 22 年度）

准教授 上別府圭子

講師 山崎あけみ

非常勤講師 鳥居央子

法橋尚宏

清水敬生

星 順隆

岩田 力

助教 杉下佳文

村山志保（～平成 21 年 11 月 休職）

山本弘江（平成 21 年 3 月～22 年 2 月）

学術支援職員 秋山照男（～平成 22 年 7 月）

教室事務 浅野万里子

面川勢津子（平成 22 年 6 月～）

教育でお世話になった先生方（五十音順，敬称略）

五十嵐隆

井田孔明

岩中 督

榮木実枝

大友英子

金森 豊

小見山智恵子

斉藤延人

下左近寿美

杉山正彦

武笠晃丈

竹永和子

塚野和代

福田桂子

堀 成美

松本和史

箕輪秀子

山下直秀

大学院生 博士

池田真理

西垣佳織

小林京子

小町美由紀

陳 俊霞

佐藤伊織

當山紀子

藤岡 寛

末次美子

大塚寛子（平成 22 年 10 月～ 休学）

古田正代（平成 21 年 4 月～平成 22 年 12 月 休学）

修士

大塚寛子（～平成 22 年 3 月）
東樹京子（～平成 22 年 3 月）
野中らいら（～平成 22 年 3 月）
三井千佳
渡邊栄美
大野真美（平成 22 年 4 月～ ）
国分麻紀（平成 22 年 4 月～）
森下美紀（平成 22 年 4 月～）
副島堯史（平成 21 年 4 月～平成 23 年 3 月 休学）
瀬戸山有美（平成 21 年 4 月～平成 23 年 3 月 休学）
大川真穂（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月 休学）
岡部花枝（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月 休学）
目 麻里子（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月 休学）

卒論生

大川真穂（平成 21 年度）
国分麻紀（平成 21 年度）
坂本 裕（平成 21 年度）
松原由季（平成 22 年度）

客員研究員

大谷尚子
内藤直子
大嶺ふじ子
河田みどり
渡邊久美
池田智子
松本和史
小西美樹
栗原佳代子
樋口明子
上野里絵
津村明美
佐々木彩子
東樹京子（平成 22 年 4 月～）

野中らいら（平成 22 年 4 月～）

三條真紀子（平成 21 年 10 月～）

山本弘江（平成 22 年 9 月～）

1. 研究活動

1-1. 学術研究業績

論文（原著論文・総説）

Yonemoto T, Kamibeppu K, Ishii T, Iwata S, Tatzaki S. Posttraumatic stress symptom (PTSS) and posttraumatic growth (PTG) in parents of childhood, adolescent and young adult patients with high-grade osteosarcoma. *International Journal of Clinical Oncology*. 2011; [Epub ahead of print]

Matsumoto K, Sumino K, Fukahori H, Kitaoka K, Kamibeppu K, Nagamura F. Stressor scale for clinical research coordinators: development and psychometric testing. *Journal of Advanced Nursing*. (in press).

Matsumoto K, Nagamura F, Ogami Y, Yamashita N, Kamibeppu K. Difficulties of nursing staff involved in phase I oncology trials in Japan. *Cancer Nursing*. 2011; 34: 369-375.

Tsuji N, Kakee N, Ishida Y, Asami K, Tabuchi K, Nakadate H, Iwai T, Maeda M, Okamura J, Kazama T, Terao Y, Ohyama W, Yuza Y, Kaneko T, Manabe A, Kobayashi K, Kamibeppu K, Matsushima E. Validation of the Japanese version of the Pediatric Quality of Life Inventory (PedsQL) Cancer Module. *Health and Quality of Life Outcomes*. 2011; 9: 22.

Ishida Y, Honda M, Kamibeppu K, Ozono S, Okamura J, Asami K, Maeda N, Sakamoto N, Inada H, Iwai T, Kakee N, Horibe K. Social outcomes and quality of life (QOL) of childhood cancer survivors in Japan: A cross sectional study on marriage, education, employment and health related QOL (SF-36). *International Journal of Hematology*. 2011; 93: 633-644.

Ishida Y, Ozono S, Honda M, Maeda N, Okamura J, Asami K, Iwai T, Kamibeppu K, Inada H, Sakamoto N, Kakee N, Horibe K. Medical visits of childhood cancer survivors in Japan: A cross-sectional survey. *Pediatrics International*. 2011; 53(3): 291-299.

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Mukasa A, Ida K, Sawamura Y, Sugiyama K, Saito N, Kumabe T, Terasaki M, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Factors influencing self- and parent-reporting health related quality of life in children with brain tumors. *Quality of Life Research*. 2012; (in press).

Kobayashi K, Kamibeppu K. Quality of life reporting by parent-child dyads in Japan grouped by depressive status. *Nursing and Health Sciences*. 2011; 13(2): 170-177.

Komachi M, Kamibeppu K, Nishi D, Matsuoka Y. Secondary traumatic stress and associated factors among Japanese nurses working in hospitals. *International Journal of Nursing Practice*. 2012; 18: 155-163.

コメント [1]: 別刷未

Ueno R, Kamibeppu K. Perspectives of Japanese mothers with severe mental illness regarding the disclosure of their mental health status to their children. *Archives of Psychiatric Nursing*. 2012; (in press).

コメント [2]: 別刷未

石田也寸志, 本田美里, 坂本なほ子, 大園秀一, 上別府圭子, 岩井艶子, 掛江直子, 岡村純, 浅見恵子, 稲田浩子, 前田尚子, 堀部敬三. 小児がん経験者の横断的調査研究における自由記載欄の解析. *日本小児科学会雑誌*. 2012; 116(3): 86-91.

上別府圭子, 東樹京子, 武田鉄郎, 堀部敬三. 日本の医療機関といわゆる院内学級における小児がん患者の復学に向けた取り組み: 質問紙調査による現状分析. *日本小児血液・がん学会雑誌*. 2012; 1: (in press).

杉下佳文, 栗原佳代子, 古田正代, 池田真理, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子. 周産期メンタルヘルスと子ども虐待対応に関する全国医療機関の取り組み. *日本周産期・新生児医学会雑誌*. 2011; 47(1): 86-91.

杉下佳文, 栗原佳代子, 塩之谷真弓, 高宮智典, 花山美奈子, 山下洋, 上別府圭子. 医療機関に求められる保健・福祉との連携—妊娠期からの虐待1次予防を含めて—. *子どもの虐待とネグレクト*. 2011; 13(1): 32-39.

栗原佳代子, 上別府圭子. 家族の心理教育. *精神科*. 2011; 18(4): 425-429.

安藤朗子, 栗原佳代子, 川井尚, 平岡雪雄, 佐藤紀子, 石井のぞみ, 山口規容子. 極低出生体重児の発達研究(7)―6歳から9歳にかけての知的発達の推移と幼児期の発達との関連について―. *日本子ども家庭総合研究所紀要*. 2010; 47: 337-344.

安藤朗子, 平岡雪雄, 武島春乃, 庄司順一, 川井尚, 中村敬, 恒次欽也, 酒井幸子, 山川恵美子, 小玉夕香, 堤美智子, 宮澤理恵, 永井桃子, 鈴木真弓, 加来嘉誉子, 渡邊寛, 鈴木玲子, 大藪泰, 馬岡清人, 島智久, 伊藤嘉余子, 山岡ティ, 木邨真美, 古河浩子, 栗原佳代子. 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅳ―父親の育児不安尺度の作成に向けて: 対象者の属性や育児困難感発生関連要因の検討―. *日本子ども家庭総合研究所紀要*. 2010; 47: 303-315.

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

1000 S. MICHIGAN AVE.
CHICAGO, ILL. 60607

TEL: 773-936-5000
FAX: 773-936-5001

WWW.CHICAGO.EDU
WWW.LIBRARY.CHICAGO.EDU

1000 S. MICHIGAN AVE.
CHICAGO, ILL. 60607

TEL: 773-936-5000
FAX: 773-936-5001

WWW.CHICAGO.EDU
WWW.LIBRARY.CHICAGO.EDU

1000 S. MICHIGAN AVE.
CHICAGO, ILL. 60607

TEL: 773-936-5000
FAX: 773-936-5001

WWW.CHICAGO.EDU
WWW.LIBRARY.CHICAGO.EDU

1000 S. MICHIGAN AVE.
CHICAGO, ILL. 60607

TEL: 773-936-5000
FAX: 773-936-5001

小西美樹, 山崎あけみ, 上別府圭子. NICU 入室児の入院早期の経管栄養による授乳場面における看護支援と母親の体験. 家族看護学研究. 2011; 17(1): 31-41.

有本梓, 横山由美, 西垣佳織, 臺有桂, 馬場千恵, 新井志穂, 村嶋幸代. 訪問看護師が在宅重症心身障害児の母親を支援する際に重要と考えている点. 日本地域看護学会誌. 2012; (in press).

コメント [13]: 別刷未

佐々木彩子, 上別府圭子. 男性保健師の性別の認識と職業上の体験. 日本地域看護学会誌. 2012; 14(2): 24-31.

コメント [14]: 別刷未

論文（依頼原稿など）

増井起代子, 上別府圭子. 心理・神経心理学的検査 治療的検査(バウムテスト・HTP・家族画・風景構成法・スクリブルとスクイグル・箱庭療法). 臨床精神医学. 2010; 増刊号 精神科臨床評価検査法マニュアル(改訂版): 483-492.

池田真理, 上別府圭子. 出産後うつ状態のリスクを妊娠期に予測する一対話を大事にした C.T. Beck 氏の方法を中心に. 看護研究. 2011; 44(4): 446-453.

小林京子. 保健師等による大槌町住民全戸訪問の現場からの報告. 心と社会. 2011; 42: 85-88.

栗原佳代子, 上別府圭子. 家族の心理教育. 精神科. 2011; 18(4): 425-429.

学会二次抄録など

山本則子, 上別府圭子. (座長) 家族看護の事例研究. 日本家族看護学会第18回学術集会シンポジウム. 家族看護研究. 2012; 17(2): 105-109.

上別府圭子. (シンポジスト) 家族看護の事例研究. 日本家族看護学会第18回学術集会シンポジウム. 家族看護研究. 2012; 17(2): 108-109.

池田真理, 上別府圭子. 産後うつ病予測尺度 (Postpartum Depression Predictors Inventory-

Revised) 日本語版の開発. 日本看護研究学会雑誌. 2011; 34(3): 180.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 村山志保, 隈部俊宏, 杉山一彦, 武笠晃丈, 斎藤延人, 澤村豊, 寺崎瑞彦, 澁井壯一郎, 高橋潤, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. 小児脳腫瘍経験者の身体的な晩期合併症の実態: 多施設共同横断調査. 小児がん. 2011; 48(プログラム・総会号): 252.

小林京子, 山口(中上)悦子, 堀浩樹, 早川晶, 足立壮一, 太田秀明, 原純一, 時政定雄, 栗山貴久子, 園府寺美, 澤田眞智子, 前田尚子, 久川浩章, 今井正, 力石健, 上別府圭子, 川崎裕英, 橋井佳子, 小田慈. JACLS ALL02 改訂版プロトコルで治療している患児と家族のQOL評価. 小児がん. 2011; 48(プログラム・総会号): 244.

国分麻紀, 山本弘江, 上別府圭子. 妊娠期から産後半年の夫婦の親意識(1) 愛情関係・性関係の変化. 母性衛生. 2011; 52(3): 178.

国分麻紀, 山本弘江, 上別府圭子. 妊娠期から産後半年の夫婦の親意識(2) 自己認識・パートナーへの認識. 母性衛生. 2011; 52(3): 178.

著書・編著・教科書など

内藤直子 (編著). あっそうか! ロイとゴードンで母性小児看護過程. 岡山: ふくろう出版; 2010.

上別府圭子. 第6章 G 児童虐待と看護 リプロダクティブヘルスケア. 母性看護学概論 (第12版). 森恵美, 高橋真理, 工藤美子, 堤治, 石井邦子, 島袋香子, 上別府圭子, 岩田裕子/医学書院; 2012: 292-299.

上別府圭子. 中学校 技術・家庭 家庭分野. 汐見稔幸 監修代表/教育図書株式会社; 2012; 44-51.

コメント [5]: 分担執筆部分のタイトル?

研究班会議・報告書など

上別府圭子. 小児がん患者のスムーズな復学のための本人・家族への支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (がん臨床研究事業) 総合研究報告書. 2011年3月.

学会・研究発表

Matsumoto K, Sumino K, Fukahori H, Kamibeppu K, Nagamura F. Impact of exposure to work-related stressors on psychological distress among clinical research coordinators in Japan. The 8th International Nursing Conference, 2011 Oct 27-28, Seoul, Korea.

Ikeda M, Kamibeppu K. The relationship between women's attachment style and postpartum depression. 10th International Family Nursing Conference, 2011 Jun 24-28, Kyoto, Japan.

Ueno R, Kamibeppu K. Perspectives of Japanese mothers with severe mental illness regarding the disclosure of their mental health status to their children. The 10th International Family Nursing Conference, 2011 Jun 24-28, Kyoto, Japan.

Watanabe E, Matsumoto K, Kamibeppu K. Development of the Japanese version of Families' Importance in Nursing Care-Nurses' Attitudes. The 10th International Family Nursing Conference, 2011 Jun 24-28, Kyoto, Japan.

米本司, 上別府圭子, 石井猛, 岩田慎太郎, 館崎慎一郎. 小児期・思春期・若年成人期の骨肉腫患者の両親における心的外傷後ストレス症状および心的外傷後の成長. 第53回日本小児血液・がん学会学術集会, 2011年11月25日-27日, 群馬県前橋市.

松本和史, 角野久美子, 深堀浩樹, 北岡和代, 上別府圭子, 長村文孝. CRCの職業性ストレスに関する全国調査(1) CRC ストレッサー尺度の開発と妥当性・信頼性の検証. 第11回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議, 2011年9月24日-25日, 岡山県岡山市.

松本和史, 角野久美子, 深堀浩樹, 北岡和代, 上別府圭子, 長村文孝. CRCの職業性ストレスに関する全国調査(2) CRC のバーンアウトおよび離職意思に関連する要因の検討. 第11回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議, 2011年9月24日-25日, 岡山県岡山市.

池田真理, 上別府圭子. 産後うつ病予測尺度(Postpartum Depression Predictors Inventory-Revised)日本語版の開発. 第37回日本看護研究学会学術集会, 2011年8月7日-8日, 神奈川県横浜市.

池田真理, 上別府圭子. 産後うつ病発症に影響を及ぼすアタッチメント・スタイルの特徴

に関する質的研究 ―標準型アタッチメント・スタイルを持つ妊婦に着目して―. 第21回日本乳幼児医学・心理学会, 2011年11月19日, 東京都千代田区.

池田真理, 上別府圭子. 産後うつ病発症に関連するアタッチメント・スタイルの構成要素: 夫との関係性に着目して. 第8回日本質的心理学会, 2011年11月26日-27日. 広島県広島市.

河原智江, 西村ユミ, 塩田藍, 池田真理, 林由美, 渡辺陽子. 認知症介護者がウェブログを綴ることの意義に関する検討(第2報): 当事者にとってのウェブログの存在に焦点を当てて. 第8回日本質的心理学会, 2011年11月26日-27日. 広島県広島市.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 村山志保, 隈部俊宏, 杉山一彦, 武笠晃丈, 斎藤延人, 澤村豊, 寺崎瑞彦, 澁井壮一郎, 高橋潤, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. 小児脳腫瘍経験者の身体的な晩期合併症の実態: 多施設共同横断調査. 第53回日本血液・がん学会学術集会, 2011年11月25日-27日, 群馬県前橋市.

小林京子, 上別府圭子. 小児白血病児の家族システムユニットの変化: メタエスノグラフィーを用いた質的研究のメタ統合. 日本家族看護学会第18回学術集会, 2011年6月25日-26日, 京都府京都市.

小林京子, 山口(中上)悦子, 堀浩樹, 早川晶, 足立壮一, 太田秀明, 原純一, 時政定雄, 栗山貴久子, 園府寺美, 澤田眞智子, 前田尚子, 久川浩章, 今井正, 力石健, 上別府圭子, 川崎裕英, 橋井佳子, 小田慈. JACLS ALL02 改訂版プロトコルで治療している患児と家族のQOL評価. 第27回日本小児がん学会, 2011年11月25日-26日, 群馬県前橋市.

當山紀子, 栗原佳代子, 上別府圭子. 保健師の家族看護実践の実態とその関連要因に関する研究. 日本家族看護学会第18回学術集会, 2011年6月25日-26日, 京都府京都市.

笠原麻美, 上別府圭子. 自死遺族が自分の体験を語り始める過程に関する質的研究. 第17回日本臨床死生学会, 2011年9月17日-18日, 兵庫県神戸市.

国分麻紀, 山本弘江, 上別府圭子. 妊娠期から産後半年の夫婦の親意識(1) 愛情関係・性関係の変化. 第52回日本母性衛生学会学術集会, 2011年9月29日-30日, 京都府京都市.

国分麻紀, 山本弘江, 上別府圭子. 妊娠期から産後半年の夫婦の親意識(2) 自己認識・パートナーへの認識. 第52回日本母性衛生学会学術集会, 2011年9月29日-30日, 京都府京都市.

松原由季, 村山志保, 並木由美江, 上別府圭子. 保育所感染症対策における看護職の専門性と認識する課題. 第17回日本保育園保健学会. 2011年11月13日, 岡山県岡山市.

講演・シンポジウムなど

上別府圭子. (総合司会) メンタルヘルスの集い. 第25回日本精神保健会議, 2011年3月5日, 東京都千代田区.

上別府圭子. 小児がん経験者や後代の成長を応援する～厚生労働科学研究結果報告～. がんの子どもを守る会香川支部 希望の会総会および講演会, 2011年5月22日, 香川県善通寺市.

山本則子, 上別府圭子. (座長) 家族看護の事例研究. 日本家族看護学会第18回学術集会, 2011年6月25日-26日, 京都府京都市.

上別府圭子. (シンポジスト) 家族看護と事例研究: 心理臨床の経験から. 日本家族看護学会第18回学術集会, 2011年6月25日-26日, 京都府京都市.

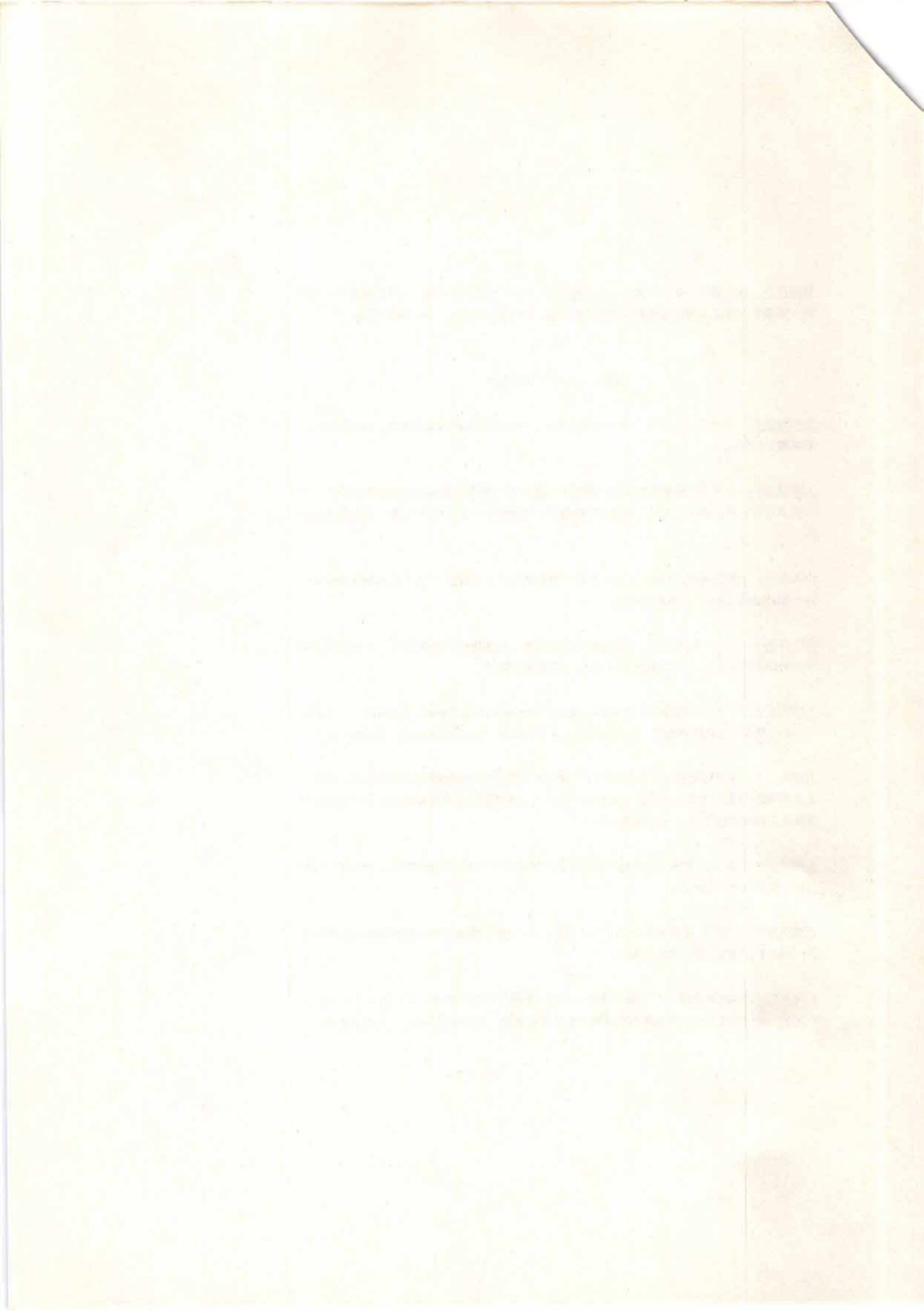
上別府圭子. 小児がん経験者の成長を応援する～Posttraumatic Growth も含めて～. (財) がんの子供を守る会関西支部 のぞみトークきんき2011, 2011年7月10日, 大阪府大阪市.

上別府圭子. 厚生労働省保育問題調査研究事業費「保育所の環境整備に関する調査研究」より 看護師等配置の意義と研修・連絡会のニーズ. 東京都社会福祉協議会保育士会保健部講演会, 2011年7月15日, 東京都豊島区.

上別府圭子. (司会) 家族への看護の技. 日本小児看護学会第21回学術集会, 2011年7月23-24日, 埼玉県さいたま市.

上別府圭子. (司会) 疾患をもつ子どもと家族への支援. 第58回日本小児保健協会学術集会, 2011年9月2日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子. 女性研究者の科学論文作成への道—看護学研究へのホップ・ステップ—チャレンジ. 香川大学男女雇用同参画推進室主催全学研修会, 2011年9月9日, 香川県高松市.



上別府圭子. (司会) 母性・父性 I. 第52回日本母性衛生学会学術集会. 2011年9月29-30日, 京都府京都市.

上別府圭子. (座長) 徳島県における学校のメンタルヘルス—養護教諭とスクールカウンセラーの役割. 第52回日本青年精神医学会総会, 2011年11月12日, 徳島県徳島市.

上別府圭子. 産後うつへの知識と母親への支援. 母子愛育会研修部平成23年度周産期医療研修会看護コース講義. 2011年11月18日, 東京都港区.

上別府圭子. グリーフケア. 小児がん・終末期の医療ケア. 日本予防医学リスクマネジメント学会平成24年第1回セミナー—みんなで考える医療現場の問題と対策—, 2012年2月11日, 東京都文京区.

上別府圭子. (コメンテーター) 東京都看護協会東部地区支部第21回看護研究実践報告会. 第26回日本精神保健会議, 2012年2月18日, 東京都文京区.

上別府圭子. (総合司会) メンタルヘルスの集い. 第26回日本精神保健会議, 2012年3月3日, 東京都千代田区.

野中由里, 池田真理, 佐藤伊織, 石井礼花. (講演) 親子関係. 第33回生物学的精神医学会サテライト企画「若手研究者のための研修講座」次世代研究者によるこころの発達と障害における分野横断的連携, 2011年5月20日, 東京都江東区.

河原智江, 西村ユミ, 池田真理, 南山浩二. Evidence から“当事者としての家族”支援を考える (会員企画シンポジウム). 第8回日本質的心理学会, 2011年11月26日, 広島県広島市.

佐藤伊織, 上別府圭子, 樋口明子, 松谷雅生, 西川亮, 柳澤隆昭. (示説報告) PedsQL 基準範囲の作成: 頭蓋内胚細胞腫患者の治療中・治療後の QOL. 第16回財団法人がんの子供を守る会公開シンポジウム, 2011年11月25日-27日, 群馬県前橋市.

一般雑誌・新聞その他

上別府圭子. 巻頭のことば 東日本大震災に寄せて—親を亡くした子供たちへの配慮—. 保健の科学. 2011; 53(5): 289.

上別府圭子. メンタルヘルスの集いを終えて. MENTAL HEALTH 心と社会. 2011; 144: 62-63.

上別府圭子. あとがき. 保健の科学. 2011; 53(8): 576.

上別府圭子. 取材記事. 長崎県、虐待防止へ産後うつ調査. 早期の調査に意義. 西日本新聞. 2011.11.29朝刊.

上別府圭子. 書評『増補改訂版 心の傷を癒すということ：大災害精神医療の臨床報告』. MENTAL HEALTH 心と社会. 2011; 146: 124-125.

上別府圭子. 編集後記. MENTAL HEALTH 心と社会. 2011; 146: 139.

上別府圭子. 編集後記. 安全医学. 2011; 7(2): 76.

上別府圭子. 巻頭のことば 東日本大震災の後のメンタルヘルス—電話相談の経験から—. 保健の科学. 2011; 53(12): 793.

上別府圭子. あとがき. 保健の科学. 2012; 54(2): 144.

池田真理. (書評) 中村伸一著「家族・夫婦臨床の実践」. 心と社会. 2012; 147: 124-125.

小林京子, 瀬戸山有美. 大槌町でのボランティア：保健師の住民全戸訪問活動に参加して. Child Research Net. 2011.

社会活動

上別府圭子. 日本小児看護学会専任査読委員 (2期目). 2011年9月～2014年8月.

受賞

該当なし

家族看護学教室年報 第9号

発行年月 平成23年3月31日

発行責任者 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

Tel : 03-5841-3556 / Fax : 03-3818-2950

